この鳥を「ちよんのすみ」と云ふ。ある時鷦鷯が、鷲と智慧くらべをして、猪の殺しくらをした。鷲は嘴で猪をつツ突き廻した。けれ共殺す事が出來なかつた。鷦鷯は猪の耳の中へ入つて暴れまはり、たうとう殺してしまひ、鳥類の王となつた。（伊藤こと）

（磐田郡佐久間村）

○

「ちよんのすみ」と云ふ。鷦鷯と鷹が力競べをやつた。先、鷹が二匹の猪が互によつて居る處を、兩手でつかんだが、猪が驚いて兩方に離れて行つたので、その鷹は二つ裂きになり死んでしまつた。次に鷦鷯が猪の耳の中に入つて鳴き、つゝきまはつたので、猪はその苦しさに堪へる事が出來ないで、谷に轉びこみ死んでしまつた。そこで鷦鷯は鷹よりも強いと云ふ。そしてその尾は鷹の尾に似てゐる。（尾關すず子）

（庵原郡富士川町）

○ 啄木鳥

晝間木をつついて歩くので夜になつて頭を病む。その爲に、夜は長い舌で頭を包んで寢ると云ふ。（西尾茂治）

（静岡市）

○

啄木鳥は木をつゝいて虫をとるのだが、餘りつゝいて夜嘴がやめて（病めて、痛んで）たまらないと云ふ。（曾根とみ）

（榛原郡御前崎村）

○ 鳶

鳶はならひ吹き（北風）の日に多く鳴くと云ふ。それは鳶の親がならひ吹きの日に死んだので、ならひの吹く日には、居ない樣でも何處からか出て來て「ぴーやほろほろほろ」と鳴いて親の年忌を弔ひに來ると云ふ。（川口操）

（小笠郡相草村）

○

鳶はえんごう（因業）で、親が海と云へば、山と云ひ、山と云へば海と云つてちつとも云ふ事を聞かなかつた。親は、死んだら山へ埋めてもらふ積りであつたから、海と云へば山へやるだらうと思つて、海へほかし込んで（はふり込む）くれと云つて死んだ。ところが鳶は、親が死んでしまふと、はじめて其の有難さが分つて、親の云ふ通り海へ放り込んでしまつた。さ

うしてから後で考へて見ると、自分がえんどうだつたので山へ埋めてもらひたいから海へうつちやつてくれと云つたのだと思ひつき、惡い事をした、海が干たなら拾ひ出いて山へ埋めてやらうと思ひ「うみん（海が）ひーよひよ〳〵」と鳴きながら親をさがしてゐるのだと云ふ。

（齋能壽子）

（濱名郡飯田村）

○

鳶の親が常に、俺が死んだら海の中にうつちやつてくれと云つてゐたので、親の死んだ時、その死骸を命に從つて海の中に捨てた。しばらくして親が戀しくなつたが、海の中にある爲にお墓參りにも行くことが出來ない。海の水さへ干れば行けるからと、常に「うみひよー〳〵」と鳴くのであると云ふ。だから此の鳥が鳴くと、海の水が天に昇つてそれが雨になつて降るから、雨が降ると云ふのである。（長谷川小柳）

○ 雀 と 燕

或時燕と雀の親が死にさうだといふ時、雀は直ぐ飛んで行つたが、燕は着物を着かへたり、お齒黑をつけてしやれて行つたので親は死んでしまつた。その罪で燕の食物は土だといふ。

（靜 岡 市）

○

燕は八丈島にゆくのに、体が續かないので飛びきれないで、途中海に落ちるが、それが飛魚になると云ふ。

（志太郡大富村）

○

「燕は七つの卵を產み、それを育てゝ七福神とする」と云つて、家の軒へ巢を作るのを大變緣起がよいと云はれる。（鈴木美代）

（志太郡和田村）

○

昔、雀の歩き方は鷄と同じ樣に足を交互に進めて歩いたさうだが、或時その親が死んだ時、雀はその親を足でけちらかした。そこで脚が交互に動かなくなり現在の樣に一足飛びに飛ぶ樣になつた。（小長谷光江）

（榛原郡御前崎村）

雀は、親が病氣だとの報せが來た時、丁度お齒黑をつけて居たが、つけかけて飛んで行つて看病してやつた。それで雀の嘴は少し黑いのだと云ふ。そしてその親孝行によつてお米を餌にする事が出來るのだと云ふ。

又雀は親を蹴つたことがあつた。その罰で歩をひろふことが出來なくなつて、一足跳びにひよい〳〵跳んで歩くのだと云ふ。

燕は親が病氣だといふ知せが來た時、髪を結つたりお化粧をしたりして居て遲く行つたので親が怒つて土や虫を餌にしよと云つた。それで燕は土や虫を食べるのだと云ふ。（川口採）

（小笠郡相草村）

○

燕はうんとしやれもんで、親が死にさうだと云ふのに、紅をつけたりお白粉をつけたりしてしやれてゐたので親は死んでしまつた。其の爲に親の罰があたつて穀類は食べる事が出來なくなつた。そして土や虫ばかりを食ふ樣になつた。その爲に又次の歌を歌ふ。「出雲の國ぢや、かひ食ふ、ゆう食ふ。此の國ぢや土食ふ。やーれ口まずいびー」（齋藤壽子）

（磐田郡佐久間村）

○

親の危篤の電報の際に雀はお齒黑をつけかけて急いだ。それにくらべて燕は紅をつけておしやれをしてゆつくりと歸つた。そこで雀は穀物を食べる事は出來ても、燕は虫より外に食べる事は出來ないと云ふ。

燕の鳴き聲を次の樣に云ふ。「べちや〳〵〳〵住川の國へ行くと蛇を食ふ。がいろ（蛙）を食ふ。なくうの國へ行くと粟倉ふ稗食ふまづい〳〵きーきー」（尾關すず子）

（濱松市）

○

昔、燕と雀は兄弟であつた。そしてお母さんが病氣になつた時二人は家に居なかつた。お母さんは段々惡くなつて遂に危篤になつたのでその兄弟をよびよせた。雀はすぐに常着のまゝ飛んできた。が、燕は黑い紋つきに着替へて來たので遂にお母さんの死に目に會へなかつた。お母さんは雀をほめて、お前には將來穀物を食べさせてやる。だが燕には虫のみを食べさせると云つて死んだ。それから燕は、黑い紋付で、いつも〳〵虫ばかり食べて居るし、雀は汚い着物で穀物を食べて居るのだと云ふ。（金原せつ）

（濱名郡芳川村）

○

昔、雀と燕とは兄弟であつた。或日兄弟の親が非常に重い病氣になつた。その時、兄弟は丁度家に居なかつた。親が病氣であると聞いた雀は、いそいで飛んで歸つて來た所が、あまりあはて過ぎて、病人である親の頭をけつてしまつた。一方燕は綺麗好きで、美しくお化粧してやつて來た。がその時には、もう親は死んでゐた。そして親の遺言に、雀には「親の頭を蹴つた罪に、地面を歩く事は出來ず、二本の足を揃へてピョン〳〵飛ぶ事しか許さない。食物は穀をあたへる。」と言つた。

又燕には「親の死目に合はなかつた罪に、穀をあたへないで土をあたへる。」と言つた。それで今でも燕は巣を作るに、土で作り食物は虫を食し、雀は巣を作るに藁を用ひ、食物は米を食するのだと言ふ。（小澤ちゑ）

（富士郡田子浦村）

○雲雀

此の鳥はもと博賭打だつた。さうして負けてばかりゐるので、日に一歩づゝでもよいから儲ければよいがと思つてゐたが、とう〳〵出來なかつた。そして雲雀になり「ヒーイチブ、日一歩」と鳴いてゐるのだと云ふ。（望月貞子）

（庵原郡興河内村）

○

この鳥の鳴聲は「粟三斗かせた（借した）さーさーよこせ、さーよこせ」（大熊治子）

（静岡市）

○

この鳥は高利貸の生れ變りであるから「利をよこせ、元よこせ」と鳴くと云ふ。（大村ちか）

（榛原郡御前崎村）

○

雲雀は天のお使ひだと云ふ。「ひーばりひばり、おれんことつたらめーつぶりよ、めーめーつぶりよ、めーつぶりよ。」と云ふ。（川口操）

（駿東郡清水村）

○鳥

鳥はとても忘れんぼださうな。

稻叢をこはすと落花生などがころころと出る事があるが、これは、鳥が食べようと思つてとつて來て稻叢の中にかくしておいたのだが、そのまゝ忘れてしまつたのだと云ふ。

それで物忘れのよい人の事を烏の様だといふ。

又烏は夕方夕焼のした時分に飛ぶので私達が子供の時は老人からこんな歌を教へられた。

「かあらす、かあらすかんざえもん、
われ、うーちがやーけるそー。
ちやあつといつて水かけろ
水がなきあ砂かけろ。
砂がなきあ小便かけろ」（山本よしゑ）

（庵原郡富士川町）

○

烏は實に執念深い鳥である。ある人が烏の卵をとりに行つた。卵をとつて居る時、烏が上に來て頭をつゝいた。それがうんで、ねぶつとなり、其の後毎年烏が卵を産む頃になると頭のねぶつが病めて、頭に穴があいたと云ふ實話がある。（西尾茂治）

（安倍郡有度村）

○

昔、烏はおしやれで自分の身体へ色をつけるにどれにしようかとさんざん迷つて、一そ全部の色を用ひようと思つて慾をかいたので、たう〳〵あんないやな眞黑い色になつちやつた。

（前島かね）

（志太郡和田村）

○

烏は今では歩く時に兩足を揃へてとんで歩くが、昔は鷄の様に歩いたのである。或時親が病氣で寢て居たその枕を足でけつた。そこで劉として兩足を縛られてしまつたので今の様に兩足揃へてとぶ様になつたのである。（小長谷光江）

（小笠郡横須賀町、其他）

○

烏の鳴き眞似をすると、口のまはりに灸をすえられる。これを「烏のやいとう」と云ふ。

（磐田郡掛塚町）

○ 鵶　鵶

みよちんと云ひ、池等の水の上にゐるが、時々もぐる。「みよちん〳〵、お前の頭に糞がついて居る」と云ふと、それを洗ふ爲に沈むのであるといふ。（鈴木きよ、川合金女）

○

「すいつちよ」「いつちよ」といふ。そして「すいつちよの頭にまぐそ（馬糞）がとまつた。あれを取つたらよい子にならず。」といつていぢめると、潜つてしまふ。（齋藤壽子）

（小笠郡相草村）

○ 木　兎

「ほいほい鳥」が鳴けば漁があると云ふ。又この鳥が鳴くと、その口から蚊を噴き出すから「蚊噴き鳥」とも云ふ。（川口操）

（榛原郡御前崎村）

○ 四　十　雀

その鳴聲は「親死ね、子死ね、四十九日の餅を食ひたい」（西尾茂治）

（庵原郡富士川町）

○

「親死ね子死ね、四十九日の餅ヲつけ」となくから縁起が悪い。（曾根とみ）

（静　岡　市）

○

四十雀はその鳴聲が不吉なものであるため、之を飼ふ人はない。「親死ね、子死ね」四十九の餅を搗け」と鳴く。（川口操）

（榛原郡御前崎村）

○

縁起の悪い鳥と云つて嫌ふ。「親死ね、子死ね、四十九の餅を食ひたい」と鳴くと云ふ。（齋能壽子）

（小笠郡相草町）

○ 樫　鳥

「がつち」と云ふ鳥は物忘れをする鳥で、栗を取り、くはへて來て、地面に隠くすが、雲を目標にしておくので遂に分らなくなる。この栗が芽を出すと、これを「がつち栗」と名付けてゐる。（鈴木美代）

（志太郡大富村）

○ 水　乞　鳥

（安倍郡大川村）

この鳥は親の病氣のとき世話もせず、自分のお化粧ばかりしてゐたので、その罰で、水を飲まうと思つても赤い着物が水に映つて飲む事が出來ないのだと云はれてゐる。それで雨が降りさうな時には、その雨水を飲むため口を開けては「みつとろろー」と鳴くのだと云ふ。しかもその口には雨が一粒しか入らないと云ふ。（小長井しも）

（周智郡城西村）

○

「みづこひどり」は親にそむいた罰で雨が千粒降つてもやつと一粒しか口に入らないので咽喉がかはいて雨を乞ふのだと云ふ。（伊藤こと）

○

「みづこひどり」の聲を聞くと何か惡いことがあると云ふ。此の鳥は非常に親不孝な人が鳥に生れ變つたのであつて、千聲鳴かねば一滴の水を飲むことが出來ないと云ふ。その鳴聲は「ひゆうひよろひよろ」「びんひよろひよろ」（荒山つる）

（磐田郡浦川村）

○

「みづこひどり」は、親が大病だのに紅白粉をつけてゐて親の死に目に會はなかつた。その報いによつて千聲鳴かねば水が一口飲めぬと云ふ。（古澤はな子）

（庵原郡富士川町）

○ うまおひ鳥

羽根が青色で、腹が赤い。鳴聲は「ううううう」と馬方節の樣である。昔、ある人が馬に永をやらずに無理に使つた。その報いにより鳥となつて、腹が赤くなり、其の色が水に寫つて水が呑めないので天を仰いで雨を呑むと云ふ。それで此の鳥がなくと雨が降ると云ふ。（西尾茂治）

（志太郡大富村）

○ ビイドロ鳥

山家に行くと、ビイドロと云ふ鳥がゐる。昔、ある處に兄弟があつた。その兄は盲目で疑ひ深かつたが弟は大變兄思ひの性質だつた。そしてよく兄をいたはり、毎日々々兄に御馳走して自分はまづい物ばかり食べてゐた。しかし兄は「盲目の自分にこれ程の物をくれるなら、目明きの弟はどんなおいしい物を食べてゐるだらう。」と邪推して弟を責めてゐた。

後たうとう兄は罰があたつて鳥になつてしまひ、咽喉がかはいて水を飲まうとするが、川の水がみんな血に見えるので飲めず、そのため、雨を非常に戀しがり「アメフレ〳〵」となく。雨が降つても千粒の中、一粒しか口に入らないと云ふ。そしてこの鳥がなくと雨が降ると云は

れてゐる。（鈴木美代）

3　繼母と繼子の話

類型をたどるの類を避けて、東方より地方順に配列せり。

（賀茂郡稲取町）

①

昔な。或一人の可愛い娘があつたとさ。其の娘の繼母は大變に恐しい人で、其の娘の兩手を切つて山奥へと追ひやつた。其の娘は毎日〳〵山に居るやさしい鳥に助けられて食事をして居た。其の鳥は或日の事密柑畑に入り密柑を採つて居た。そこを運惡くもその畑を所有して居る大家の息子に見つかつた。息子はとがめた。鳥は其のわけを詳しく話した。息子は大變に同情して其の手の無い娘を引取つて世話をした。それより早月は流れた。其の息子にいろ〳〵と緣談が持上つた。しかしどの緣談も破れてしまつた。其の息子は手無しの娘が、手こそ無いけれど大變に美しく可愛い〻ので自分の妻に欲しかつたからであつた。息子の父母は其の娘との結婚を許した。それより幾年か過ぎ娘は可愛い〻玉の樣な赤ちやんを生んだ。けれど其の時運惡

く夫である息子は江戸に行つて留守だつた。そこで飛脚に手紙を持たせて江戸に向はせた。道を急いだ飛脚が、一寸腰かけ茶屋に腰を下してお茶を呑んで居ると、茶屋のばあさんが親切にもてなしてくれるので一寸前述の話しをした。「世の中は樣々で手無しの娘からもそれは〳〵可愛らしい赤子が生れた。それで私はその報せを持つて江戸に行く途中だ」と。するとさてそのばあさんはびつくり、其の娘は確に自分が手を切つて捨てた子と氣がつき又もや苦しめてやらうと思ひ、其の飛脚に澤山の酒を與へ、飛脚の醉つて居る間に手紙をこつそりと開いて讀んで見ると、「玉の樣な赤子が生れた。」と云ふ報せがあつた。そこでばあさんは、「犬だか猫だか分からぬ樣な赤子が生れた。」と云ふ報に書き直して知らん顏をして居た。それとは知らぬ飛脚は又元氣よく江戸に向つた。その報知を見た息子は、情深くもかう書いた。「犬猫の樣な赤子でも大切に養てよ。」と。飛脚はこの返事を持つて歸途についた。さて又飛脚は前の腰かけ茶屋に腰を下したところ、又もや澤山の酒を御馳走してくれた。又飛脚は前と同樣眠つてしまつた。又ばあさんは、手紙を書き直して、「犬猫の樣な赤子はいらぬ。その子を背負つてどこへなりとも家を出て行く樣に」と書いた。これがとゞいた時には、娘は勿論、父母は大變に悲しんだが、息子の意ならばと仕方なく、女は赤子を背負ふて家を出た。しばらく行くと大川があつて、水がだう〳〵と流れて居た。女が此の川を渡らうとして橋の中途迄來た時に、背

負ふた赤子をどうした拍子か川の中に落してしまつた。その時女は子供を可愛いゝ餘りに、手の無い事などわすれて赤子を川から救ひ上げようとした。と拍子に不思議や兩手がついてうまく子を助ける事が出來た。女は考へた。これは母様のお助けだと。それから三年三月の間、神様をお祀りしてあげようと、明神様の近くに住んだ。それから又三年三月も夢の間に過ぎた或日のこと、親子二人の住家に一人の男が訪れた。此の男は女の夫、つまり子供の父で、歸鄕後二人をさがし求めるために巡禮の姿をしてあちらこちらとさまよつたものだつた。親子三人はめでたく、もとの住家に歸る事になつたが、不思議にも、小さい其の子供が道を敎へるので、行つて見ると、そこには腰かけ茶屋があり、おばあさんがゐたが、その手は無くなつて居たとさ。繼母のおばあさんの手がとれて、繼子の手になつたのだとさ。（田中綾子、田中淑子）

（賀茂郡稻取町）

②

昔或る處に、おふじとおたまと云ふ二人の娘があつた。おふじは姉でおたまは妹だつた。或時二人の母は、二人に各々袋を與へて椎の實を拾ひに山に行く樣に云ひつけた。母は姉のおふじに椎を拾ふ時はおたまの後について拾ふ樣にと云ひつけた。それにはわけがあつた。妹娘のおたまは母のつれ子でおふじは母には繼子にあたるのだつた。何につけてもおたまは可愛くおふじはにくかつた。今日も二人は椎の實を拾つて歸つて來たが、妹娘は澤山姉娘は少ししか拾つて來なかつた。又翌日も同樣だつた。繼母はいつも〳〵姉娘を責めるのだつた。或日のことて、「おふじ〳〵一寸おいで」とさゝやいた。おふじはきみ惡く思つたがおづ〳〵近寄つた。すると其の女の云ふには、「おまへの袋には小さな穴がある、それでいくら拾つても皆こぼれてしまふのだ」と敎へてくれた其の上に穴を縫つてあげようと云つて縫つてくれた。そして穴を縫ふ間おふじに自分の亂れた髪をすかせた。縫ひ終ると又親切に「おふじよ、家の戸棚の隅に美しい着物も下駄もあるであらう」と敎へてくれたと思ふと、しばらくして女の姿は消え去つてしまつた。其の日はおふじは澤山椎を拾つて歸つた。山の不思議な女はおふじの亡き母の姿であつた。幾年か過ぎた。或時の事、或お大名がおふじおたま姉妹の家に立寄つた。其の時母はおたまに美しい着物を着せてお茶を出す樣にと云ひつけた。さておたまは美しく着飾つてお大名にお茶を進めたが大失敗…それはお茶を進める時に立つたまゝ進めたためにお大名は無禮を憤つてお茶を受け取らうとはしなかつた。繼母はしかなたく今度はおふじに云ひつけた。おふじはお大名の前に出たくとも一枚の晴着も持つて居なかつた。其の時ふと思出したのは、あの山に椎を拾ひに行つた時の不思議な女の言葉である。もしやと思つて戸棚の隅を探して見

ると、不思議にも美しい着物がちやんと置いてあつた。喜んだおふぢはそれを着て、丁寧に、靜かに、座つてお大名にお茶を進めた。今度はおたまとは反對に、お大名に大變氣に入つた。それより間もなくお大名の仰せによつておふぢはお大名のところへ行く樣になり幸福な生活へと向つた。

「今まではふじや、たまやと呼ばれたが、咲いて行くぞやふぢの花。」

こんな話さ。（田中綾子、田中淑子）

（賀茂郡竹麻村）

⑤

繼母と、その繼子と實子とがあつた。或日二人に袋を渡して、椎拾ひにやつた。が繼子の方の袋は穴があつたのだつた。それで一ぱいになつたら歸つて來なさいといつた。二人は拾ひながら山道を登つてお地藏さんのあるところに來た。實子は一ぱいになつて歸つたが繼子は一ぱいになる理由はなく、仕方なしにお地藏さんの所にとまる事になつた。「お地藏さんとまらしてね」するとお地藏さんが「鬼がくるよ。でもそのときは鳥のなく聲をまねればいい」と言つた。果してその通りだつた。鳥のなく聲に鬼は「さあ朝だ」とにげ去つた。その後姿のをかしさ。けれど我慢した。鬼のにげた後には澤山の寶物があつた。子供は大よろこび、お金持ちになつたとさ。（大野しげ）

⑥

或農家に、繼母とその繼子の姉と實子の妹とがあつた。或日母親は二人に大豆を蒔いてこいと命じて種子をくれた。が姉には、いり豆、妹にはよい種子であつた。それで姉の大豆は生えてくる理由はないのに、毎日の樣に、「妹のばかり出た、蒔き方がお前は惡い」といつて責めた。姉はその度に畠にいつては泣きかなしんだ。しかし間もなく、そつ涙でうるほつたのか唯一本生えて來た。やがて實のる時が來た。ところがその一本には三石六斗の大豆がなつてゐたそして妹の澤山生えた木からは、たつた一斗しかとれなかつた。それで遂に繼母は改心して姉にあやまつたといふはなし。（大野しげ）

（賀茂郡竹麻村）

⑦

昔、或所に繼父母があつた。或日お父さんが旅に出かける事になつたので、その繼子娘は針箱とかんさしを買つて來て下さいとたのんだ。繼母は父の出た後、非常に怒つてその娘を殺して畠にうめた。間もなく埋めた所に竹が生えて來た。父はそれとは知らずその竹で笛をこしら

へた。ところが何時ふいても「おツかさんエー櫛もかんざしも要らないがーめかごで水くむお
いたしや」と聞えて來たと。それだけ。（大野しげ）

（田方郡西豆村小下田）

⑥ レ

昔、或處に男の子と女の子の二人があつて、お母さんは死に、次ぎのお母さんが來た。そしてお父さんは旅に出て行つた。其の時二人の子供はお父さんに土産をあつらへた。

女の子は、櫛とかんざし。男の子は笛と太鼓。

其の留守中、繼母は、目籠で大きい釜に水を汲ませた。子供は漸くにして水を汲むと、今度はそれに火を燃さして煮立せた。そして其の上に鎌を置いて、子供に取らせにやつた。子供はそれを持ちに行つて、釜の中に落ちて死んでしまつた。

その子供をいけると、其處から竹が生えて來た。その竹をこもさうさんに賣つた。虚無僧はそれで笛を作り、吹いて歩いた。そして丁度その子供達の父親の居る處に行つた。すると笛が「笛も太鼓も入りません、ヒチクの竹になりました。」となつた。親は不思議に思つて、家に歸つて聞くと、繼母は子供は遊びに行つたと言つた。が待つても歸つて來ない。そこでだんだんしらべて行くと遂に事情が判つて、繼母は罰はせられるに至つた。（山田茂子）

⑦

昔、或る所に、一軒の家があつた。その家には、母親と、二人の子供とが住んで居た。姉の方はその母の本當の子供でなく繼子であつたので、母はその子供がにくくて〳〵仕方がなく何につけてもその子供をいぢめるのであつた。妹の方は本當の子供なので大へんに可愛がられてゐた。しかしその妹は大へんに偉い子供であつて、母親が繼子に毒なお菓子をくれたりすると「お姉樣そのお菓子は毒ですから、食べてはいけません」といつてはかばつてゐた。所が母親は繼子をどうしても殺してしまひたいので、妹が色々の事をして姉をかばへばかばふ程ひどい事をした。おしまひにはおばけになつて毎晩その子をおどかして、おどかし殺さうとまでした。繼子は毎晩幽靈が出るのでおつかなくて、それを妹に話した。すると妹は「今晩寢床をかへてねませう」と云つて、その晩はかへつこしてねた。一方母親は、そんな事とは知らずに、今晩こそは殺してくれませうと思ひ、切れものを持つて來てその子供を殺してしまつた。が朝見ると、それは自分の可愛いゝ子供であつたので、やつと目が覺めて大變後悔したといふ。人をいのらば穴を二つ掘れといはれてゐる樣に、惡い事をするものではない。惡い事をすると馬鹿な目にあふといふお話。（齋藤かつ江）

（富士郡須津村）

③。

（庵原郡蒲原町）

繼母は實子が可愛く、繼子を殺さうとして、或日米櫃の中に實子を入れ、繼子をぬかの中に入れた。繼母の考へでは繼子は食る物がなくて早く死ぬであらう。實子は米を食べて生きてゐるだらうと思つたのだ。が實際はたべものよりも寒の問題で、實子は遂に米がつめたい爲に死し、繼子は糠の中でぬく〳〵してゐた。

或日繼母は實子と繼子とを二人して栗拾ひにやつた。其の時實子には普通の袋、繼子には底のない袋をあたへた。二人は仲よく拾つてゐて遂に實子のは一杯になつたが、繼子のは少しもたまらない。實子は之を見て言ふのに「姉さん袋をかへませうね。私が一杯拾なくとも母さんは怒らないが、姉さんが一杯拾つて行かないと叱られますからね」と二人は袋をかへて歸つた。（鏡島喜世子）

①

（清水市）

或時繼母が、お豆を子供に食べさせようとした時の話。

繼子には一粒づつ取らせ、實子には二粒づつ取らせた。すると繼子は一粒づつだから取りよいのでどん〳〵食べ、實子は二粒はさむに容易でなかつたので、結局繼子の方が澤山食べたといふ。

或時繼母が、子供に川へ水を汲みにやるのに、實子には桶を持たせ繼子には笊を持たせてやつた。すると實子はどん〳〵汲んで歸つてしまつたが、繼子は何度汲んでもザア〳〵こぼれてしまつて汲めないので困つて泣いて居ると、そこを僧が通りかゝつてそのわけを聞いたので以上の事を話すと「この袖で笊の底を作つて汲みなさい」と云つて片袖くれた。それを敷いて水の澄むのを待つて汲まうとすると中に金の指輪が落ちて居たのでそれを拾つて、水も汲んで歸つたといふ。（池山ゆき）

⑭

（安倍郡長田村）

昔、繼子があつた。ある時お父さんが伊勢參りに出掛けた。すると繼母はその子を釜うでにし、釜の後に其の子を埋めて知らぬ顏をして居た。父が歸つて來た。實子達がお土産の笛を買つて來たかと聞くと買つて來ないと云ふ。そしてふと外を見ると、一本の筍が出て居た。で父はそれで笛をこしらへて鳴らした。すると「もう一度お父さんに會ひたいなあ」と幾度鳴らし

ても鳴つたといふ。（鶯巣くり）

（安倍郡長田村）

⑪

昔、繼子と實子とがあつて、或日二人で栗を拾ひに行く事になつた。繼母は自分の子には底のある袋をやり、繼子には底のない袋を持たせてやつた。實子の方は栗を拾へば溜つたが、繼子は皆下から抜けて何も溜らなかつた。そして繼子の栗の漏るのを實子は拾つて歩いたと云ふ。（鶯巣くり）

（安倍郡長田村）

⑫

昔、お竹といふ娘とお花といふ娘があつた。お花とお竹とは大變仲好しであつた。そのうちお竹の母が死んだので、隣りのお花の家に貰はれて行つた。お花の母は或る日お竹を山へ連れて行く事になつた。お花は私も連れて行つてと母に頼んだが、母は聞入れない。そこでお花はお竹に袂へすくも（もみがら）を入れて行つて道々こぼして行く樣にと頼んだ。母はお竹を山の中の方へ連れて行つた。その途中ですくもはつきて仕舞つた。母は山の中の大きな井戸にお竹を落して大きな石を蓋の上に置いて歸つた。

後でお花はすくもの跡をつけて行つたが、途中で消えてしまつた。困つたが、又、たどり〳〵行くと井戸があつて、そこから「助けて〳〵」と叫ぶ聲がするのでこれはお竹さんに違ひないと思ひ、石を取除けようとした。が餘り大きいので取れないでゐると、そこへ知らないお爺さんが來て二人でやつと石を取りのけたが、その時はお竹は段々埋つて行つて、首、頭と次第に見えなくなつてしまつた。（鶯巣くり）

（靜岡市）

⑬

夫が成田山へお參りに行つた留守に繼母が繼子を殺さうと思つて大きなお釜へ入れて煮た。夫はむしが知らしたのか早く家にかへつて來て、子供がゐるか聞くと繼母は「今、外へ遊びに行きました」といつた。

お釜を見るとぐら〳〵煮立つてゐるので「なにを煮てゐるかと」と聞いたら「みそ豆を煮てゐる」と答へた。あまり不思議だので蓋を開けてみると自分の子が中にゐたで出したら。急いその子の身体中成田山のお札が一ぱいくつゝいてゐた。成田山のおかげで助かつたのである。

それから「三里かへつつてもみそ豆を食べるものだ」といふのださうである。（金子千代子）

(志太郡大富村)

⑭

繼母が繼子に魚の尾ばかり食べさせた。繼子は大變利口だつたので、「お母様ありがたうございます。私をあとにしてくれるので、こんなに、尾を食べさしてくれるのでせう」といつては、有難がつてゐた。すると繼母は今度は、魚の頭ばかり食べさせた。その子は、「あゝありがたい、私を大切に思つてくれるのでおかしらをくれる」といつてうれしがつた。繼母は又、魚の眞中ばかり食べさせると、その子は、「ありがたいことだ、お母様は私にばかり眞中のおいしい所をくださる、もつたいない〳〵」と禮を言つた。そこで終にお母さんも心がなほり、二人は大變仲よくなつた。(鈴木美代)

(志太郡大富村)

⑮

昔、ある所に、意地の惡い繼母と、思ひやりのふかいその連子と繼子との三人があつた。繼母は毎晩、白裝束で、髪を振りみだして、繼子の一人ゐる室へ來ては、をどかしたので、繼子はとう〳〵病氣になつてやせてしまつた。これを見た、妹の連子は、あまりやせてゆくので、不思議に思ひ、聞き訊すと、「毎夜お化が出るのだ」といふので、勝氣で同情のある妹はたう〳〵ある晩、よくといだ出刄を持つて、姉の床に、代つて入り、お化の出るのを今か〳〵とまつてゐた。すると案の定、夜中の二時頃、すーと音がして、白裝束のすごいお化が入つて來て、顏をなめ始めた。妹は、「この時、」とばかり、持つてゐた出刄でお化をつき刺してしまつた。物音に驚いて姉娘が飛んでいつて見ると、すでにお化は退治せられた後であつた。二人はそつと、そのお化の顏を見ると、意外にもそれは繼母であつた。

二人はあまりの事に氣絶せんばかりになつたが、すぐ大岡様の所に自首して出た。すると大岡様は、母を殺した事は惡いが、お前達の眞の心は立派であるから、ゆるしてやると仰せになつた。(鈴木美代)

(小笠郡相草村)

⑯

昔、繼子を二人、お母親の所へあづけて、親父は、金比羅參りに行つた。二人の子は、歸る時には、デン〳〵太鼓と京の笛をお土産に買つて來てくれと云つた。さてお參りを濟ませて、土産を買つて、家へ來ると、女竹と男竹が二本庭に生えてゐた。子供がゐないので、どうしたのかと訊ねると、死んだので、此處へ埋めました。さうしたら、竹が生えたのだと云つたので、悲しさのあまり、せめて笛でも作つて、記念にしようと思ひ、笛を作つて吹いてみると、

一本は「デンダイコも何もいらないピーツ」て鳴つた。も一つのは「京の笛も何もいらないピーツ」と鳴いた。（宮能壽士）

（小笠郡土方村）

⑰ 〇

昔、或る所に、先妻の子と後妻の子との二人の姉妹があつた。或る日二人は山に椎の實を拾ひに行つた。母が渡した袋は、先妻の子のものには底に大きな穴があり、後妻の子のものは丈夫で立派なものであつた。暫く拾ふと、後妻の子が、「姉さんもう一ぱいになつたんだから歸らうではないかね」と云ふた。先妻の子は自分の袋をのぞいて見るとまだまだ半分にもならないので、「姉さんのはまだ一ぱいにならないから、今少し拾つて行く。お前は先におかへりなさい」といつて先に歸らした。姉はただ一人だん〳〵と山の中に入つて行きとうとう日が暮れてしまつた。もう道が分らず家へは歸られぬのでとぼ〳〵と山の奥深く入つて行くと、一軒の家がみえた。喜んでそこにたどりつき一晩泊めてくれと頼むと、お婆さんが一人出て來て、「この家は恐ろしい鬼の家であるがよいか」といふ。もうなんでもよいから泊めてくれと云ふので、「それでは緣側から入つて、家の緣の下にかくれなさい」と言つて、かくしてくれた。其の中に若い衆がどや〳〵と歸つて來た。そして鼻をくん〳〵やりながら、「婆さんなんだか人間臭いではないか」といふ。「何の私が人間なんぞ捕へるものかね、」と婆さんはうそをいつてゐた。其の夜も開けて鬼どもは再び働きにと出ていつた。その後で娘を出して云ふには「お前さん今のうちに早くおにげなさい。それにはこの婆の着物とかごを背負つて行き、途中鬼共にあつたら、お前たちの食べものを取りに行くといつて行きなさい。そして村境まで行つたら、婆の着物も籠も引ぼかしておにげなさい」と教へた。娘は教へられた通りにしてやつと家に歸つて來た。來てみると、家の人は皆芝居をみに行つて、姉の子には麥をついておけと言置きしてあつた。仕方なく麥をついて居たが、獨言を云ひながら、「臼の中から、おかご出よ臼の中からお菓子出よ、臼の中から着物出よ、」といふと、不思議や願つたものがみんな出て來た。そこで姉の子はそのかごに乘つて芝居見物に行き、澤山のお菓子を自分の家内の居る所に放り投げて又そのまゝ家に歸り知らぬ振して麥をついて居た。そのうちに妹が歸つて來て、「さつき、姉さんにそつくりの人が私達の所にお菓子を投げてくれた」とさも不思議さうに顔をみつめてゐた。それから後は繼母がこの先妻の子をいぢめる度に、先妻の子には反對に幸福な事ばかり起つた。そこで繼母も不思議に思ひ、それから自分の子と同樣に可愛がり、姉妹二人とも非常に幸福になつたといふ事である。（湯川菊枝、野々山ざん）

—七十八歳老女に聞く—（小笠郡相草村）

昔、繼子と、實子とを持つた女があつた。根性の惡い繼母は、自分の子を非常に可愛がり、繼子をば大變にくんだ。着物を着せるにも、繼子には汚いのを、自分の子には、けつこい（結構な）着物を着せた。

冬になつて寒くなると、自分の子をば、米の中へ寢かした。さうして繼子は憎いので、すくもの中へおいた。けれども、お米は冷いので、自分の子はこゞえて死んでしまつた。繼子は暖いすくもの中にゐたので、死なずに生きてゐた。それだけ。（齋能壽子）

（小笠郡三濱村）

繼母が自分の子と繼子とを養つてゐたが、どうしても繼子が憎くて自分の子が可愛くてたまらない。そこで自分の子を美しい米にねかし、繼子を糠の中にねかした。翌朝行つて見ると、米の爲にひえて自分の子は死んでゐたと云ふ。（松下きん）

（小笠郡三濱村）

繼母と二人の子と父と四人暮しの家があつた。父親が或時伊勢參りに行つたので、笛と太鼓を買つてきてくれるやうに子供がたのんだ。その留守に繼母は子供を煮殺して背戸口にうめて置いた。やがて父親が笛と太鼓を買つて歸つてくると、背戸口に二本の竹の子が出てゐた。「これはなんだ」と言ふと、竹の子は「笛も太鼓もいりません」と言つてすつこんで（引込んで）しまつたと云ふ。（松下きん）

（小笠郡三濱村）

或お寺樣が、繼母が繼子をいぢめると云ふ家に、おときに行つた。すると繼母が大釜で何か煮てゐる。「何だ」と聞くと「これは味噌豆だ」と言ふ。お寺樣は一度途中迄歸つて見たが、何だか、子供が煮殺されてゐるやうに思はれてならないので、再び行つて、繼母に言ふのに「味噌豆は三里行つても歸つて來て食べるものだと云ふから一つもらはう」と言つて蓋を取つて見ると、案の定子供が眞赤にゆでられて死んでゐたと云ふ。（松下きん）

（小笠郡横須賀町沖之須）

昔、或所に繼母があつて、自分のほんとの子は大へん可愛がり繼子をいぢめた。

ある日自分の子と繼子に大きな袋を持せて此の袋に一杯にならなければ歸つてはならぬと言つて栗を拾ひに出した。しかしまゝつ子の袋には穴があつて、いくら拾つても拾つても一杯にならないで獨り夜になつても一生懸命拾ひつゞけた。すると白い衣をきた弘法樣が現れて、古い帽子をくれ、それを底にしいて拾ふ樣にと敎へてくれたのでまゝつ子はその通りにし、やつと一杯になつて歸つた。

又或時、急に雨がふつて、その國の殿樣が雨宿りをした。その時殿樣は盆の上に皿をのせその上に雪をのせその上に松を立てたものをもつて來て、二人の娘に歌を詠めと言つた。先づ實子から詠むことになり「盆の上に皿がありその上に雪がふつて松が立つ」と歌つた。次に繼子は「盆皿やさら〳〵の上に雪ふりて雪をねとしてそだつ松かな」と詠んだ。此を聞いた殿樣は大へん感心されて、此の娘を殿樣の御殿へつれて行つた。いぢめられたまゝ子はそれから幸福に暮したといふ。（横山ティ）

72

（周智郡城西村）

或る所に非常に意地の惡い繼母があつた。そこには先妻の子供である、十二、三歲位の男の子がゐた。その子は學問もよく出來る子供であつたが、實母がなくなつてからは、學校に於ても、いつも時間中に居眠りをし、從つて成績も上らなくなつた。先生は不思議に思ひながらひどく叱りつけた所、その子は涙を流して、現在の事情を先生に語つたのであつた。そこで先生はその夜ひそかにその家の戶外にたゝづんで內の樣子を伺つた。

すると、夜も次第に更けて草木も眠るうしみつ時になると、髮は、さんばら亂れがみで、白い着物を着た繼母が、口には蒟蒻のなまぬるいのをくはへて、その子のそばへ近より、「私は亡くなつたお前のお母さんだ」といつてその蒟蒻で子供をなめずりまはしていぢめてゐるのを見つけたのであつた。そこで早速先生は警察にとどけて、その繼母を罰して貰つたといふ。

（荒山つる）

73

（周智郡城西村）

昔、或所に、母親を亡くした一人の可愛さうな子供があつた。やがてそこへは新しい母親が迎へられた。その母親にはその子供より一つ年下のつれ子があつた。始の中こそ二人を同じ樣に可愛がつたけれ共、日の過ぎるに隨つて繼子につらく當る樣になつた。或日母親は繼子には穴の開いたかごとお辨當にこうせん（麥こがし）を持たせて之を風の吹く所で食べる樣にと言ひ渡し、實子には穴の開かないかごと普通の御飯をお辨當に持たせて栗拾ひに出した。やがて

お晝頃になると繼子は風の吹く所へ行つてこうせんを食べたけれ共風に舞つてしまつて口へ入つたものは僅かであつた。それに引替へ實子の方はおいしいお辨當を暖い所で腹一杯食べて二人は又栗拾ひを始めた。夕方近くになると實子の方は「私はもう栗が一杯になつたから歸るけれどお前も一緒に歸らないかい」と言ふ。繼子の方は「私はまだ栗が一杯にならないから歸られない」と、なほ熱心に拾つて居た。それではと實子の方はさつさと歸つてしまつた。繼子はだん〳〵暗くはなつて來るしもう今からでは家へも歸られないしどうしたら好からうと思つて途方に暮れ、ふと山の上を見るとたつた一つあかりのついて居るのが見える。仕方がないから一つあすこへでも行つて泊めて貰はうと、山をだん〳〵上つて行つて案内を乞ふとおばあさんが一人きりゐろりの側に座つて居た。わけを話して今晩とめてくれないかと言ふとおばあさんはしばらく考へて居たが「私の家の人は鬼で、もうぢき歸つて來るが話をきけば可愛さうだから私が二階へかくして泊めて上げよう」と言つた。そしておばあさんは栗を燒いて食べさせ二階へ上げてしまつて何食はぬ顏をして居た。やがて夫の鬼が歸つて來て「おばあさん。今日は何だか人臭いけれど里から人が來はしないか」と言つて鼻をピク〳〵動かして臭ぎまはつた。おばあさんはわざと平氣を粧つて「いゝえ誰も來はしない。あなたの鼻はどうかしてゐませんか」と言つて其の場をごまかして寢てしまつた。繼子は一晩中がた〳〵震へて眠られなかつたやがて夜が白むとほつと安心した。鬼は又例の如く出て行つてしまつた。その後でおばあさんは繼子にお土産だといつて箱をくれた。繼子は喜んで家へ歸りそれを開けて見ると目もまばゆいばかりの寶物が一杯出て來た。それを見たお母さんは、今度は前と反對に實子にやぶれかごとこうせんのお辨當。繼子に穴のないかごと御飯のお辨當を持たせて栗拾ひに出してやつた。前日と同じ樣にして日暮近くになると繼子の方は栗が一杯になつたといつて歸つて行つた。實子は一人後に殘つてお腹は空いて來るし日は暮れるし心細くなつたけれ共寶物の事を考へて我慢した。そして繼子に敎へられた山の上を見上げると、話の樣に火が見えたのでそれを目當に登つて行き、昨日繼子がしたと同じ樣な事をして二階に上げられた。しばらくすると鬼が又戻つて來て人臭いと言つたけれ共、お婆さんは昨日の樣にしてごまかし、夜が明けて鬼の出てしまつた後で同じ樣に土産と言つて箱をくれた。實子は喜んでそれを持ち歸つて蓋を開けて見ると中から百足や蛇や色々の虫が出て來てとう〳〵お母さんと實子とを食ひ殺してしまつた。

（伊藤こと）

◎ ベニザラ、カケザラの話

（濱松市）

先妻の娘をベニザラ、後妻の娘をカケザラと云つた。ベニザラはカケザラより年上であつた

が極く正直な、氣だての優しい娘であつたにも拘らず、カケザラの母は常にベニザラを憎みどうにかして、これを無き者にせんとしてゐた。或日二人を栗拾ひにやつた。ベニザラへは底の無い袋、カケザラへは普通の袋をそつと與へて「それ〳〵一杯になるまで、歸るな。」と言ひ渡した。二人は山へ行き、一生懸命拾つた。カケザラはやがて一杯になつたので姉より先に急いで歸途に着いた。此の山は暗くなると狼が出るからである。ベニザラは正直な子だつたので一生懸命で暗くなるまで夢中で拾つてゐた。やがて暗くなりだすと、狼がガサ〳〵と、方々から來る氣配がし出した。ベニザラは始めて、我に歸つて夢中で足の向くまゝに歩いた。そのうちに、日は全く暮れて、しかも方角の全然解らない所へ來て了つた。もう泣いても泣いてもだめだつた。ベニザラはあかりを求めて、歩き續けた。ふと向ふに燈が見えるのでほつとした氣持で其の方へ進んで行つた。辿り着いて中を見ると一人の老婆が糸を繰つてゐる。ベニザラは事情を話して一晩泊めて下さいと賴んだ。すると老婆は「自分は泊めてやりたいが息子が二人共鬼で、今に歸つて來るから食べられて了ふだらう。それより歸る道を敎へて上げる。」と言つて丁寧に敎へ、袋一杯の栗と、小箱と、一握りの米を與へた。栗は母への證據として、小箱は何でも欲しい時、其の名を言つて三度叩けば出るのだと云ひ、又米は途中で鬼の息子に會つたら之を細かく粹いて、口の周りへ塗つて、死んだ態になつて居よ、と附加へた。ベニザラはお禮をして敎へられた道を歩いた。やがて笛の音がしだしたので敎へられたまゝに、道端に死んだ眞似をしてゐると、赤鬼と青鬼と近づいて來て「ヤイ、兄弟人喰いぞ〳〵」と言つて、側へ寄つて暫く樣子を見てゐたが「だめだ、兄弟腐つてゐる。口に虫が一杯だ。」と言つて、又笛を鳴らしながら行つて了つた。ベニザラは笛がだん〳〵小さくなつて行くのを見計らつて安心し、又敎へられた道を急いだ。

かうして一夜はやがて明けた。家では繼母が昨夜はあの憎いベニザラ奴が狼の餌食になつたであらうと思つて、朝から清々した氣持で食事をしてゐた。其所へやつとベニザラが歸つて來たのである。死ぬどころか無事な上に栗は山盛に持つてゐる。繼母はどうにも叱り樣がなかつた。かうして數日は過した。すると、或日芝居の良いのが其の村に掛つた。繼母は、芝居が好きだつたので早速カケザラを連れて見物に行つた。ベニザラは母の言附通り歸るまでに、總ての用意をして待つて居なくてはならなかつたので、一生懸命働いてゐた。すると三四人の友達が來て、どうしても芝居へ行かうと言ふ。ベニザラは母の言附の事を話した。すると、日頃同情してゐた友達は「それなら皆で全部の仕事を手傳つてあげるから、行きませう。」と言ふのでベニザラも斷り兼ねて同意する事にした。全部が心を合せて働いたので、一日掛る仕事が三十分位で濟んだ。やがて見物する事になつたが、ベニザラには一枚の着物もない。友達は皆美

しい清物である。どうしようと思案に暮れた擧句、思ひ附いたのは彼の小箱であつた。それで早速それを利用すると立派な仕度が出來上つた。かうしてベニザラも其の日、樂しく芝居見物が出來た。すると芝居小屋に、丁度殿様が居られた。ベニザラは氣が附かなかつた。ベニザラは自分達の下の方に母とカケザラが居て、カケザラが盛に菓子をせがんでゐるのを見て、自分の菓子を落してやつた。お殿様は之をぢつと御覽になつて誰であるかを内々に調べられた。

やがて明る日、不意に美々しい行列が其の村を訪れた。そして、その駕籠はベニザラの家の前で止つた。カケザラの母は大喜びであつた。其の頃殿様が御殿女中をお探しになつてをられるといふ事を知つてゐたのである。それで夢中になつてカケザラを着飾らせて、お迎へ申した。殿様は「この家には二人娘がある筈だから、今一人出せ。」と仰せられた。

ベニザラは其の時、母に無理矢理、風呂桶の中に詰込まれてゐたのであつたが、母は殿様のお言葉に仕方なくそれを出した。見ればカケザラに比べて何といふみすぼらしさであらう。併し殿様は問はれた。「此の二人で昨日芝居へ行つたのは誰か。」其所で母は「このカケザラ奴で御座います。」と答へた。殿様は「いや其の様な子ではなかつだが。」と言つたけれど、母は飽くまで言ひ張るので、終に和歌を作らせて見る事にした。盆の上に皿、皿の上に鹽を、其の上に松葉を一本刺してそれを題にして作らせる事にした。先づカケザラは大聲で詠んだ。

「盆の上に皿をのせ、皿の上に鹽をのせ、鹽の上に松を刺して、おゝつゝかい棒あぶない。」そして彼女は無禮にも頭をポンと叩いて飛んで行つて了つた。次にベニザラは詠んだ。「盆皿や、皿てふ山に雪降りて、雪を根として、育つ松かな」何といふ落着き、何といふ床しさ。殿様の求められた娘は確かにベニザラであるべきだつた。其所で早速仕度を調へて、立派な駕籠に乘せ遂に御殿へ連れて行かれて了つた。後をぼんやり見送つてゐたカケザラの母はその時發狂してゐた。それでカケザラを空き菰に乘せ綱を附けて「サア、カケザラお前も御殿へ行くんだ」と言つて、ずる〳〵夢中で引張り廻つたので深い溝の中へ轉り込んで其の儘死んで了つたといふ事である。ベニザラは其後出世して、お妃になつたと云ふ。（渡邊ほな）

㉑ オサン、オイチ、オトミの話

（濱松市）

先妻の娘をオトミ、後妻の娘をオサン、オイチと言つた。オトミは美しい顔だちと、優しい心を持つてゐたが、オサンオイチは、我儘で强情で、母そつくりの惡い根性を持つてゐた。しかも、オサンは眼が三つ、オイチは眼が一つであつた。繼母はオトミをどうにかして失はうと企てゝゐた。ある日オトミを遠い遠い畑へ耕作にやつた。そして「よく耕したらお晝にに來るんだぞ」と言つて家からつき出した。その畑は遠くて遠くて、しかも廣い廣いもので、一日で

も到底耕せさうにもなかつた。それでもオトミは正直で優しかつたのでせつせと働いゐた。やがてお晝になつてお腹が空いて來たのに、お晝に行く事は出來なかつた。夕方になつた。くつたりとして横にあつた大きな松の根に腰を下して「あゝお母さんが生きてゐたなら……」と一入シク〳〵泣いて了つた。併し、一日の疲れはやがてオトミを泣き寢入りにウト〳〵とさせた。暫くして自分の前が急に、明るくなつたのに氣が附いてふと見ると、お觀音樣が立つておられる。顏を見るとお母さんにそつくりで、優しい聲で言はれるのに「其の松の根を掘りなさい、お前の好きな御馳走が出ます。」そして姿を消した。夢現であつたけれどもお腹が空いてゐたので掘つて見た。すると後から後から立派な、それは今まで一度だつて食べた事のない御馳走が出て來た。オトミは一生懸命で食べ始めた。話變つてオサン、アイチは母の言附でオトミの樣子を見てゐたが、矢張りぼか〳〵して二人居眠りをしてゐた。オイチは眼が一つであつたので見えなかつたが、オサンは眼が三つだつたので、一つの眼は常に開いてゐた。丁度それでオトミが御馳走を食べてゐるのを見ると、オイチを起し夢中で家へ歸つて訴へた。オトミはお腹が一杯になつたので、又働いた。かうして二日目の夕方やつと耕し終つて家へ歸つた。すると母はいきなり、其の持つてゐた鍬の柄でオトミを思ふ存分なぐつた。そして「御馳走を誰が呉れたか白狀しろ」と言つて、尙續けて打つたので、その柄が二つにポキンと折れて了つた。母は小氣味よげに笑つて二人の子供と共に中へ入つて錠を掛けて了つた。オトミは一人痛む体を押へて、しく〳〵泣いてゐた。やがて、オトミは又自分の前が明るくなつたのに氣が附いた。見ると二日前の觀音樣が又現れてをられる。そして「あの鍬を裏の畑へ埋めなさい。さうすれば明朝金の木が生えてゐるでせう。そしたら、その實を取つて賣りなさい。そして自分の欲しいものは何でも、買ふがいゝ」かう言つて、又姿は何所かへ消えて了つた。オトミは鍬を埋めた。やがて明朝來て見ると、美しい美しい金の木が生長して、朝日に輝いてゐた。かうして其の日から何不自由のない生活が暫く續いた。すると或日噂を聞いてお殿樣が來られた。そして「オトミと云ふ娘は氣立がよいといふ事だ。しかも、わしは昨夜觀音が夢に現はれて「美しい一人の少女を授ける」と言はれて、此の方角を指されたのぢや。」と言はれて、遂にオトミを御殿に連れて行つて了はれた。其所で繼母は美しくて仕方がないけれども、どうしようもないのでかねて、欲してゐた裏の金の實を取る事にして、オサン、オイチをそれに上らせた。すると何所からか枝や、とげが出て毛を卷きつけたり、体を引掻いたりして、傷だらけにして了つた。それで明日こそは鍬で引拔いて取らうと思つて、明朝早く裏へ行つたら、もう金の木は影も形も無かつた。

其の後オトミはお妃になつて幸福になりオサン、オイチは傷が元で死んで了ひ、母もそれで

發狂し、遂に死を遂げたと云ふ。（渡邊はな）

4　蛇の婚姻話

①　—五十六歳老女に聞く—（賀茂郡稲取町）

さうだな。昔ある處に娘を三人もつた男が居た。其の人が、或日のこと用事のために、道を歩いて居ると、一匹の蛇が今にも蛙をのまうとして居たので、其の人は大變に蛙を可愛さうに思ひ、「あゝわしの娘が三人あるから其の中一人をおよめに與へよう。だから蛙をのむ事は止めておくれ、」と云つた。すると蛇は蛙をのむ事を止めた。其の男は、後になつて考へた。「これはしまつた事を云つてしまつた。娘をよめにやる等と」けれどしかたがない娘に其の事を話した。第一、第二、第三の娘も皆それを退けた。男は、云つた。あゝわしの命もこれでない」と。すると第三の娘はそれではと「私はおよめに行きませう。けれどそれには、支度に、瓢簞千と、毒酒一升だけを、用意して下さい」と賴んだ。娘はこれを持つて蛇の處にとおよめに行つた。そして蛇が家には入らうと言つて池を指した。娘は言つた。「私は池の中には入りませう。けれど私の願をも、一つだけで良いからきいて下さい」すると蛇は快く受け入れた。

娘の云ふのには、「それでは此處に千の瓢簞がある。其の中の一つで良いから池の中に沈めてくれる樣に」そこで娘が云ふ通り、蛇は沈めよう〳〵と努めた。しかしいくらやつても〳〵沈まない。そこで娘は氣を利かして云つた。「まあ大變ですね、それでは、一杯お酒を召し上つてから元氣を出して沈めて下さい」言ひながら毒酒一升を與へた。何も知らぬ蛇は喜んで美味しくのみ乾した。間もたく蛇は死んでしまつた。

娘は蛇の處におよめに行かずして歸る事が出來たとさ。（田中綾子、田中淑子）

②　（賀茂郡竹麻村）

或山の中に一軒家があつた。そこには一人の娘が居たが、何時のまにかこの娘がお腹が大きくなつた。で母親が驚いて尋ねると、毎晩誰か來るといふ、話を聞いて母親は、娘に、又夜來た時に、夜着針に黑糸四本通して袖に縫ひつけるやうにと注意した。

あくる朝母が糸を辿つて行くと、大岩屋の中まで行つた。その中からは唸り聲が聞え、それと共に親蛇らしいのが、「お前は毎晩いたづらばかりしに出掛ける。どらんなさい。今にお前は死にますよ」と言つてゐる。すると小蛇は「私は死んでも娘の中に子供が澤山あるからよい」といふ。すると親蛇は「でも五月の菖蒲湯を浴びれば子供は下りて來て出てしまふ」と言

つた。娘の母親は驚いて家にとび歸り、早速菖蒲湯を作つて娘に使はせたと云ふ。

その爲に五月節句には菖蒲湯を皆浴びる事になつた。又何時でも、四本糸で物を縫ふ事を禁じられて居る。（大野しげ）

—六十八歳老翁の話—（賀茂郡三濱村）

昔、一人の百姓が田へ行つて仕事をしてゐると、一匹の蛙が蛇にのまれかゝつてゐた。百姓は大變憐に思つて蛇を殺して蛙を助けてやつた。

そして何時の頃からか自分の家の隣に、大變にやさしい好い女が住む樣になつた。氣立がやさしくて、体が丈夫で働き者であつたので、百姓は我丁の嫁にと願つた。そしてその女を嫁にもらつただが、その嫁をもらつてから、夫であるその百姓の丁は、大層弱くなつて病氣ばかりする樣になつた。だん〳〵病氣は惡くなる一方だつたが、嫁は隨分親切に力を限り看病してゐた。

ある日大變に美しい聲で唄をうたいながら一人の遍路さんが廻つて來た。そしてその家の門に立つて言ふのに「この家には今大層重病な方がある樣ですがその方の病をなほすのに只一つの道があります。それは、此所の社の森の木の上にある鷲の卵を食べさせればなほります」と

その卵のある所は大きな木の最も頂上で、どんな事をしても人間の力では得る事が出來ないのだつた。がお嫁さんはどうしても自分が行つて卵を取ると言ひ、木によぢ登つた。そして木の中頃まで行くと、卵が孵化して中からたくさんの鷲が飛び出て、その女を突ついて下へ落してしまつた。落ちて死んだところを見るとそれは一匹の蛇であつた。そして、美くしい聲で唄つて來た遍路さんは百姓に助けられた蛙であつたと。（澤村國子）

—六十歳老女の話—（田方郡中郷村）

山道の途中で、ひきぎやある婆さんがへーびにのまれかけてゐるのを見て、ある男が、

「おい〳〵へーびや、お前は何故ひきぎやある婆さんなんかをのまうとするのだね。ひきぎやある婆さんを助けてやれ。可愛想ぢやないか。其の代りに私の娘をお前の嫁にあげるから。」

と言つた所が、ぢーつとその男を見てゐたが、急にひきがへる婆さんを放して山の奥へ去つて行つて終つたですに。で男はひきぎやある婆さんに

「お前さんは、すんでの所でのまれる所だつた。がわしが來たおかげて助かつたのだ。早く家へ行きなさい。」

と言つて逃してやつた。所が歸路はつと思つたですに。へーびだ、何だ、だましてやれ、と

思つて娘をやると言つたが、ぢーつとおれの顔をにらんで居た樣子は、實に總毛立つ。これではうそはいへない、どうしよう。娘がそれぢやあーと言つて嫁に行つてくれゝばよいが、どんなものだか。嫁に行くのを皆嫌つたらどうしよう。そしたらへーびの奴、何しでかすか知れたもんでない」と言ふので、心配しいしい家へ來て了つたですにさ。で一番上の娘に、「こんなわけだせーに嫁に行つてくれ、その代りお前の欲しい物は何でも買つてやる」と言つたが「いやだ」と言つて應じない。次の娘もいやだと言ふ。で三人目の娘で一番末の娘が、「姉さん達はいきなさらないせーに私が行つて父さんを安心させる」と承知しましたせーに、非常に喜んだんださうですに。所が娘の言ふには、「たつた一つ願がある。それは外でもなく、千なりふくべを千と、針を千本ふくべにさして貰ひたい」と。そこで其通りにしてやると、娘は「これで外には何もいらない」と、へーびの迎へに來るのを仕度して待つてゐると、夕方になると、果して男にばけたへーびが約束通り娘を貰ひに來た。で親はふくべの入つた袋をかついで娘の後をついて山へ送つて行つたのです。へーびは物も言はずずん〳〵山奥へつれて行き、やがて池へ行きつくと言ふ頃になつて、へーびは父親に歸る樣にと言つたので「ぢやなあー、休を大事にしなよ。又わしが會ひに來るでな。ぢや娘を何分とどうかよろしくお願ひします」と依頼して、まあ家へ歸つて來て了つたです。二人はやうやく、池の端まで來た。その時へーびが娘に、先に池へ飛込む樣に進めた。それで「どうか貴方が先に入つて下さい。さうすれば私は直に飛込みますからと」言つたので、へーびの男はへーびとなつて飛込んで了つた。で娘は手に持つてゐた千たりふくべに針をさしたのを入れた袋を、池の中へドブンと投込んで後も見ずに逃出したのですに。さうしたらどうです。へーびは可愛想に、それを娘だと思つてのんで了つたですが、針があつたせーにまもなく死んで了つたですにさ。ですけど魔者に近いものですせーに、何を仕返すか知れませんですよね。で娘は一生懸命逃げて來ると、ぼつこをしようつたり着たりしてゐる婆さんに出會つたですに。ぼつこを着て如何にも人間の樣ですけども、それあ、みやあ（前）に親の助けたひきぎやある婆さんだつたですに。

「お前さんはそのまゝではとても歸る事は出來ない。だからこのわしの着てゐるぼつこをやるせーに、これを着ておかへんなさやあ。さうすれば夜でも晝でも魔者に會ふ事はないせーに」と言ふので、娘はその着物を借りて身につけて無事に家についたと言ふですに。で千なりふくべは魔よけになるださうですに。（多呂南海子）

（富士郡須津村）

⑤

或所に一人娘をもつた家があつて、その娘に堅い良い婿を貰ひたいと云つて居た。すると或

時、蛇がよいお侍になつて「私は堅いものです」といつて來た。その家では信用して貰つた。二三日して婿が「家へ行つて來たい」と云ふので「こんなによい侍は一体何處が家だらう。一つその行く所をつきとめてやりませう」といつて、婿のひぢの上に白い糸を通した針をさしてやつた。その糸をたぐつてどん〳〵ついて行くと、石垣の穴で「うん〳〵」うなつてゐた。

（齋藤かつ江）

⑥ 一六十八歳老翁の話一（庵原郡興河内村）

昔、或山村に律義な男があつた。

或時山へもや（薪）取りに行つた。或山の澤のあたりで一匹の蛇がかいろ（蛙）を呑みかけてゐるのを見つけた。

持つてゐた杖で蛇をしかつて「これ〳〵かいろのいのちを取つてはいけない。にがしてやれ。」と言つてへびをついた。するとへびはかいろをはき出して、かいろもへびもどこかへ行つてしまつた。この男は「あゝものゝ命をたすけてやつて今日は善い事をした。」と喜んで家へ歸つた。

其の翌日一人の若い侍がやつて來た。

「御免なさい。私は昨日お前さんに急所をつゝかれて餌食のかいろを逃がしてしまつた。わたしも餌食に離れてみると命がたもてない。それでお前さんの娘を一人わしにくれてくれ。」と申込んだ。この男には娘が二人あつた。そこで

「お前が人間ならば娘もくれてもやらうが、蛇ではくれてやる事は出來ない。」と、ことはつた。侍は

「しからばお前の命をもらはう」と言つて、この男に馬乘にのつて「娘をくれるかお前の命をよこすか」と言つた。二人の娘はびつくりして、妹娘がいふことに「姉さんは殘つてゐてお父さんの世話をしてやつて下さい。わたしがへーびに呑まれて行きます」と言つた。

お父さんが止めても姉さんがとめてもきかない。たうとう此の蛇侍につれられて行つた。

だん〳〵山奥へ這入つて行つて大きな池の所へ行つた。蛇侍が、「二人共この池に入らう」といふ。

娘は家を出る時に澤山の瓢箪を持つて行つた。そこで「お前さんが先づ池へ這入つて、この瓢箪を一つのこらず沈めて下さい。さうしたらわたしも這入ります。」と言つた。

そこで蛇侍が池に這入つてその瓢箪を沈めにかゝつたが、一つ沈めれば他がいくつも浮き、なか〳〵もつて沈まない。侍は一生懸命になつて、つひに自分の正体をあらはし大蛇ん（に）

なつてこの瓢箪を沈めるけれどなか〳〵沈まらない。

無中になつてゐる時、この娘の後から「こちらへおいでなさい」といふ聲がきこへた。振返つてみると遠い所に汚いお婆さんが一人立つてゐる。近附いてみると「私はあなたのお父さんに救けられたかいろです。あの蛇は瓢箪を沈めきれなくて終ひにはあそこで死にます。貴方は私と一しよに歸りませう。」といふから、此のお婆さんにつれられて山を出た。やがて婆さんは一本の汚い手拭を娘にくれて、これをかぶると婆さんの姿になるからといふから、それをかぶつて行つた。山を越へ村を通り、幾日も幾日もかゝつてある町へ出た。そして日が暮れたからある一軒の長者の家へ泊めてもらふ事になつた。するとかいろの婆さんは

「これからは一人で行かれますからお別れします」といつて歸つた。娘はこの長者の家に二三日滯在してゐると此の家のおかみさんが縫ひものをしてくれといふ。そこで縫ひものをしてやると、またゝく間に着物でも羽織でも出來てしまふ。お掃除をたのまれてすれば三人五人でするところを唯一人で、しかも些の間にしてしまふ。汚い婆さんだが仕事の早い事にはおどろく程だといつてほめそやしてゐた。

或時此の娘にお庭の掃除をたのんだ。娘が箒と塵取りをもつて庭の掃除をしてゐる時、蜘蛛の巣がはつてゐたから、顏にかむつてゐた汚い手拭を取つて、その巣を掃つた。すると此の汚い婆さんの姿はたちまち變つて、目のさめる樣に美しいむすめになつた。

それをこの長者の息子が眺めて驚き、座敷へつれて來て家中で譯をきいたのでのこらず話した。そこで息子が是非家の嫁になつてくれといふので、此の長者の家の嫁になる事になつた。いよ〳〵祝言の日になつたが、この汚い手拭を肩へ掛ければ十二ひとえのにしきの着物となり又ひるがへして肩に掛けると綾羅の着物となつて美しい事限りがなかつた。

其の國は加賀の國であつた。加賀の國の殿樣が其の話をきいて、其の手拭を御寵になつた。これを槍につけてつかへば一人で十人の働をなし、鉢卷にして戰へば十人を一人で相手にして戰ひ勝つと云ふ。不思議な手拭であつたから、加賀の殿樣が申しうけてお寶にしたといふ事である。（大熊治子）

（安倍郡千代田村）

⑦

或村に一つの池があり、そのくろ（傍）に一軒の家があつた。その家には非常に美しい娘があつた。處がこの池の主である蛇はこの娘が好きで、美男子に化けて此の家に出入してゐた。娘の母親は心配して男子の住家をつきとめる事となり、娘は男子の着物にこつそり、糸のついた針をさして、その歸つた後をつけて行くと、池の主である事が判つた。ところが池では蛇の

親が子蛇の身体に自分等の最も忌む針がついてゐる事を知り用心する樣に注意してゐた。

娘の方はもう蛇の子供を宿してゐたが、五月五日の菖蒲酒を飲むと忽ち流産して、その生まれたのは皆蛇の子で盥に七杯あつたと云ふ。それで今でもその地をなたりヤー村と云ふさうである。（伊良むめ、青木きみ、原川美江）

―七十九歳老翁の話―（安倍郡大川村）

昔、大川村日向（ヒナタ）といふ所の大谷といふ家に美しい娘があつた。ある時その娘は親に向つて「此の頃毎晩私の所へ遊びに來るお武士があつて困る」と言つた。親は「それでは、その武士がだれだか知つてゐるのか」と問ふた。娘は「知らない」と言つた。そこで親は「ではその武士の袴の所へ白い糸を縫ひつけておけ」と言つて、娘にその後をつけさせた。娘は親の言ふ通りにして、武士の後をつけて行くと、ある峠の所まで來ると、その大杉の所で武士の姿が消えてしまつた。親達はその木を切つてしまはなければ悪いと思つて伐り倒した。ところがそれと同時に娘の体は蛇体になつてしまつた。親達は蛇体の娘を家に置かれないので意を決して、その杉の木で船を造つて蛇体の娘をのせ藥科川を下した。親は娘をこがれるの餘り、木枯森の所までついて來たが、そこで別れた。それがために「こがらし」とかいふ。（増田きぬ江）

―志太郡焼津町）

或山里に、爺と娘二人の三人暮しの家族があつた。その家では、池のはたの田を五かまち、六かまち、も持つてゐたが、稲の出來さかる頃は丁度水が干あがつてしまふので田圃が出來ずに困つて居た。或日いつもの樣に田まはりに行つて見た。水は相變らず干てゐたが、何處からかごろ〳〵と音がきこえる。音のする方に尋ねて行くと池のそばで大蛇が寢て居た。これあー大變と思つてゐる間に、針をペロリと出して起き上つた。爺さんが「お前さん此の池の主さんか」と尋ねると「うんさうだ」といふ。「さうか、それぢやあ氣の毒だが、お前の力に依つたら此の田に水をなみ〳〵とひく事が出來るだらう。どうかさうしてくれ」「それはらくな事だが、その代りおれの題ひを聞いてくれよー」「へーへー田んぼに水をつけてくれしやあすれやあ、何でも聞きませう」「さうか、ぢやあ言はう。お前んとこには二人の娘があるが、どちらでもいゝから一人をくりよう。」爺さんは困つて思案したが、とう〳〵約束して、田には一ばい水をひいてもらつた。さて家に歸つて見ると、考へこまずには居られない。ものも言はずにしよげて居る樣子を見て、娘共は「お爺さん、何か心配事でもあるのですか」と尋ねると「いふにいはれない悪い事をして來てしまつた。」といふ。「いふにいはれぬとは何か、どうか話

してくれ」とたのんで、漸く蛇にお前等二人の中一人をくれてやるといふ約束をした事を話した。娘達も驚いたが親孝行なものであつたので、姉妹は「私が行く」「いゝえ私が行く」と爭つた結果、籤を引く事にした。やると妹娘がそのくぢに當つた。お爺さんは悲しさに堪へられずどうかして救ひたいとは思つたが、如何ともする事出來ず、愈々約束の日が來た。娘は大きな樽の中に入れられてつれて行かれるのを待つて居た。たう〳〵やつて來た。「今日は。今日は約束の娘をもらひに來た」と立派な男になつて現れた。爺さんが承知した。樽の中に居るから」といふと、忽ち相をかへて、蛇となり、ぐる〳〵と樽をまいてしまつた。此の時裏の方からざわ〳〵と物凄い音がきこえて來た。又何物があらしに來たかとおそれて居ると、何萬とも知れぬさはがにがやつて來たのである。家に入るやいなや、大蛇の眼といはず、首といはず一ぱいにたかつて、ちみくり殺してしまつた。そこで妹娘も蛇の嫁となる事をまぬがれた。一たい、さわがにはどうしたわけかと考へて見るに、娘はお釜やお櫃をいつも裏の方の谷澤で洗つたが、それについて居る飯粒をいつも、さは蟹に與へて居つた。日頃親切にして貰つた人の危期を知つてさは蟹が助けたのだとさ。（神尾すず、岸本勝代）

（周智郡城西村）

昔ある所に、非常な財産家があつた。そこのおばあさんは、一匹のひきがへるを大切にして池に飼つて置いた。ある日變な泣聲がするので急いで出て見ると、今にもそのひきがへるが蛇に飲れようとして居る所であつた。おばあさんはびつくりして前後の考もなく「家の娘を嫁にやるからどうかその蛙を助けてくれ」と云ふと、蛇はそのまゝすつと何處かへ行つてしまつた。おばあさんは先刻考もなく發した言葉が氣にならないでも無かつたが、まさか蛇が嫁貰ひに來もしまいと思つて氣をゆるして居た。約束の日になると果して蛇は美しい男に化けてやつて來た。おばあさんはびつくりしたけれど約束はどうする事も出來ないので、たうとう娘を墓場へやる樣なつもりで白裝束をさせて家を出してやつた。蛇はうれしさうに美しいお嫁さんと共に出て行つた。二人が野原の一本道を歩いて居ると、急に空が曇つて大粒の雨が降り出し、それに風も加はつてだん〳〵勢を增し、とう〳〵蛇の婿さんを吹きとばしてしまつた。間もなく暴風雨はやんで又元通りの好いお天氣になつた。娘はたつた一人殘され、日は暮れて來るし困つて居ると、きたないきたないぼろを身にまとつたおばあさんがとぼ〳〵と歩いて來た。娘は「こゝら邊にどこか泊めてくれる家はないでせうか」と訪ねた。するとそのおばあさんは「この道を眞すぐに行と大きな家がある。その家へ行つて賴んでごらんなさい。けれどその家ではあなたの樣にそんな綺麗な着物を着て行つたでは、とてもとめてくれまいから、私のこの上に

着て居る着物を上げるからその上に之を着て行きなさい」と丁寧に教へてくれた。娘は言はれた通りにその家へ行つてわけを話して頼むと、その家の奥さんが「今日は丁度召使ひ達が皆家へ歸つて、丁度あの室が開いて居るからあすこへ泊まりなさい」と云つてこゝろよく承知してくれた。しばらくしその家の息子が用事で臺所の所を通ると、召使達の部屋に火がともつて居る。今日は召使は居ない筈だのにどうしたらうと、不思議に思つて母親に聞いて見ると、母親が云ふには「先刻きたないきたない乞食娘が來て泊めてくれと云ふので、きたないけれど丁度あの部屋が開いて居たので泊めて上げたのです」と言ふ。息子は「さうですか」と答へてその部屋をそつとのぞいて見ると、きたないどころか美しい白裝束の娘靜かに座つてゐるので、びつくりしたが、急にその○が好きになり、母親と相談したりして、娘の身元を尋ねると、これ〳〵のわけで、身分も卑しからぬものである事が分つたので、二人は目出度く結婚し、娘は一生を幸福に暮したと云ふことである。大風を吹かせたり、汚いお婆さんに化けたりしたのは、助けられたひき蛙であつた。（伊藤こと）

（濱名郡曳馬村）

○ はかまの由來

昔一人の男が夜道にまよつてしまつた。すると、とてもきれいな女の人がきた。男の人は遂にその美しい人と、仲よしになつて結婚し、女の人は月みちて、出産することになつた。女の人が言ふのに、「私が、子供を生んで百日たゝない中はあなたは、來ない樣にして下さい、そして見ない樣にして下さい」と。男の人は、よし〳〵といつて、始めは、その通り見ずに又來ずに居たが、少したつてくると、どうしても見たくて仕方がない。そつと小屋のすき間から、のぞいて見ると、お母さんが大きな〳〵蛇になつて、子供を一生懸命なめて居たので、男はびつくりして腰をぬかしてしまつた。その大蛇もすぐその事を知つて、美しい女の人となつて出て來て、「あなたは私の頼みをきいて下さいませんでしたね、私はこれで、もう會ふことは出來ません。一緒に居ることは出來ません。ですからこの子だけあなたにさしあげます。」といつて、なめつくせなかつた腰から下にはかまをはかせて、その子を男に渡した。袴はこゝから始つたのだといふ。（金原せつ）

—六十二歳老女の話—（濱松市）

○

昔或所に木樵の親子が住んで居た。木樵が或日山に行かうとふと山道にさしかゝると、目の前に、大きな蛇が、可愛らしい蟹を呑まうとして居る。可愛想に思つて、蛇に言ふには「その蟹を呑まないで、助けたならば、わしの娘をやる」と約束した。其の次の日、約束の通り蛇が

やつて來た。木樵は、約束はしたものゝ、娘をやるのが可愛さうでならなかつた。すると蛇はその娘の家を、あの長い〳〵體で、ぐる〳〵卷いてしまつた。今や娘の命があぶなくなつた時前に木樵が助けた蟹が、幾萬とも數知れない、多くの仲間をつれて來て、蛇の體に、所きらはず食ひついた。如何に、大きな蛇も、この多數の蟹には手向ひする事も出來ず、たう〳〵死んでしまつた。（小澤ちゑ）

○ 猿の婿入り

—七十六歳女の話—（賀茂郡三濱村）

あのなア。六十になるお爺さんが山へ牛蒡を掘りに行つた。そしたら地面が堅くてなかなか掘れなくて困つてゐた。遠くで見てゐた猿は氣の毒になつて、このお爺さんを助けてやりに來た。このお爺さんは「この牛蒡を掘つて呉れゝば、あしに三人の娘があるから一人をお嫁さんにくれる」と云つた。猿は喜んで上手に牛蒡を掘つた。お爺さんは家へ歸つたけれど、さつき猿に云つた事が心配で心配でたまらなかつた。お爺さんが餘り心配さうな顏をしてゐるので娘は心配して尋ねると、お爺さんは今日のお話をすつかりした。一番目の姉樣は猿のお嫁さんに行くのはいやだと云ふ。次の娘もいやだと云つたが末の娘は「私が行きます」と云つたので、お爺さんは米一升と、石臼を持たせてゐたら、そこへ猿が來たのでこの米と石臼を猿に背負はせて家を出て行つた。

だんだん山道に入つて行つた。澤のある所に櫻の木がありそれに花が咲いてゐた。娘はあの花を欲しいと猿に云つた。猿は早速木に登つて行つた。猿は馬鹿なもんで、石臼と米を背負つた儘、木登りしたのであやまつて落ちて死んでしまつたつてさ。（飯作ヤス子）

5 其他

○ 人間になり損ねた鶯

（賀茂郡竹麻村）

立派な大きな、お邸があつた。そこには唯一人の美しい娘が住んでゐるはかりだつた。或男が想を懸けて、「何でもあなたのいふ事をきくから結婚してくれ」と申込んだ。すると「私のところへ來たら、三年間私のゐる所を見ないで待つて居て下さい」といふ返事。男は承諾した娘は奥へ入つていつたまゝ姿を見せなかつた。男は淋しく暮してゐたがそのうちにやつと後六十日といふときになつた。何をあの娘はしてゐるのだらう。男は急にみたくなつた。耐え切れなくなつた男はたう〳〵、大きな三寶の上にのつてお經をよんでゐる娘の姿を見てしまつた。娘のそばには、又、梅の古木が一本あつた。男が見終つて去らうとすると、娘は急におい〳〵

泣き出した。驚いて理由をきくと、「後六十日で出世が出來るものを、このお經をよんでしまはないうちに人にみられた。もう仕方がない」といふ。男は今更困つたがどうする事も出來なかつた。するとみる〳〵その邸はなくなり野原になつてしまつた。その跡には一本、梅が生へて、その枝に美しい鶯がとまつてゐた。かくして鶯は、遂々人間になる事が出來なかつた、と云ふ話。（大野しげ）

（周智郡城西村）

○ 拾子の話

或山寺の坊さんが、通りがゝりに、まだ生れて間もない女の兒の捨てられてあるのを見て、可哀想に思ひ家へ拾つて歸つて、自分の子の樣にして育てた。やがてその子が大きくなると、近所の子供は皆よつて「親無し子、拾ひつ子」等と口々に叫んでその女の子をいぢめた。お坊さんはそれを見て、この子はこの地に置いたのではとても出世の見込はないから、折角今まで育てゝ來たけれども、あの子の將來の爲を思つてどこかへ出してやらうと決心し、或日娘を近くに呼んで「お前はこゝに居たのではとても出世は出來ないから、どこへでも自分の好きな所へ行つて幸福に暮しなさい。別れるに當つてこの金の玉をお前に上げるが之は大變に大切な玉だから、お前の命にかゝはる樣な時でなければ使つてはならない」と云つて一つの金の玉を渡して泣く泣く別れた。

娘は一日旅を續けて日も暮れかけたので、どこかへ泊めて貰はうと思つて、大きな家の門をくゞり泊めてくれる樣にたのむと「家は丁度今日は取込みがあつて泊めて上げられない。けれ共この隣の家へ行つて賴んでごらんなさい」と云ふので、云はれた通りに隣へ行つて賴むと、男の人がたつた一人居て「男ばかりで何もお世話は出來ないけれど、それでも好かつたらお泊りなさい」と云つてくれるので、娘は喜んでその家に泊つた。翌日になるとその男は、今日は一寸釣に行つて來るから留守をたのむと言つて出て行つてしまつた。夕方になると又歸つて來て何の變りもなくすぎた。又その翌日は昨日と同じ樣に釣りに出かけて行つた。同じ樣にして一週間ばかりすぎてしまつた。一週間目の朝、出がけに男は「あなたも毎日一人で退屈でせうから、今日は一つ藏を開けてごらんなさい。第一の藏は穀物の藏で、第二の藏はお金の庫ですから、それまでは開けてもいゝですが、第三のくらはどんな事があつても決して開けてはいけません」と云つて出て行つた。娘は云はれた通りに第一の藏を開けて見ると穀物が一杯つまつて居た。そして第二の藏にはお金が一杯入つて居た。ここまで來ると娘はどうしても第三の藏が見たくてたまらず、あれ程かたく止められたにもかゝはらず、とう〳〵第三の庫を開けてしまつた。すると、そこには唯池があるのみで、何にも外に見當らなかつた。が、しばらくして

池の水がざわ〳〵と波立つたかと思ふと、大きな龍が口を開けて今にも娘を飲みそうにして追かけて來た。娘はこんな時と思つて例の和尚さんから貰つた金の玉を投げつけて後をも見ずに逃げて來て家の中でぶる〳〵ふるへて居ると、やがて男が歸つて來て「どうしたのですか、ばかに顏色が惡いぢやありませんか」と云ふので娘はつゝみ切れず、第三の藏を開けた事、金の玉を投げた事等すつかり話すと、男は「あゝさうですか。それは好い事をしてくれました。實はあれは私の父で、死んでからも金の欲しさにあの樣な姿になつてこの世へ出て來て居るのです。あなたが金の玉を與へて下すつたのなら、父はもう滿足して、二度と再びあの樣な姿をこの世に表しはしますまい。私が毎日あゝして釣りに出かけたのも、實は父の食べる魚をとりに行つてそして今までそれを父に與へて居たのです。今はもう父の出て來る心配もなくなりましたからあなたの意志さへあれば結婚しませう。」

二人はそこで結婚して幸福に暮した。

（賀茂郡竹麻村）

○蛇の卵

或山の近くに一人のおばあさんが住んでゐた。畠にいつてみると美しい卵が一つあつたので早速拾つて歸つた。ふつの中に入れてあたゝめてみた。幾日か經つて開けてみると、小さな蛇が居た。驚いて「まあ、鳥だと思つたら蛇だつた。もう出てゆきなさい」と外へ出した。それから數年は夢の樣に經つた。さうして、大山へゆく人は誰一人として歸つて來た者はないといふ話かあちらこちらに傳はつた。村人は相談した結果山狩りを行ふ事になつた。そこでおばあさんも出かけた。道に出てみると小さな蛇が居る。「今日は山狩り、こんな小さな蛇から殺してゆかう」といつて殺した。殺すと同時に、蛇はみる〳〵ふくれて、大蛇になつた。此の事が村中にひゞき、おばあさんが大蛇を殺したとさわぎだした。さうして、之が又時の天子にきこへて、大へん、ご褒美に與つた。その小さな蛇は、嘗て育てられたものだつた、といふ話。

（大野しげ）

○蛇息子

（田方郡中郷村）

爺さんと、婆さんの二人がありましてね、どうしたわけかこの二人には子供しが無かつたんださうです。で何時も、子供が欲しい、子供が欲しいと思つて居たんたさうですよ。で爺さんは山へ柴刈りに行つた留守中、婆さんは何も、しよだやあーがないもんで、爺さんが山から歸つて來ると、お腹へぼつこをうんとこしよ詰めちやあ

「爺さんや、わしや腹がかう、こんなにでつかくなりがしたに。」

と言つては喜ばせてゐたんださうですに。所がどうですに。本當に生れたですよ。その子供は人間ではなくて、へーびだつたんださうですよ。で爺さんと婆さんは驚いたですがね。何かの因果だとあきらめましてね、へーびの子を御生大事にと育てたんですつてさ。所が段々でつかくなつて來て、人樣の目にもとまる樣になりましたせーに、家に置く事もならずに爺さんと相談して婆さんは、山へそのへーびを捨てに行たんださうですよ。で婆さんの言ふには、

「お前を今まで、しづをや〳〵と、名までつけて、自分の子供の如くに可愛がつて育てゝ來たが、人樣の目にもかゝる程にでつかくなつて見れば、家にお前を置く事も出來ないせーに、爺さんと二人でお前をこの山へ捨てに來たゞせーに、決してわし等を恨まずに山の中で何か食べて無事に育つておくれ」

と因果を良く含めて歸つて來たのださうです。

それから幾年か經つたですね。その山を通るとでつかいへーびに喰殺されると言ふ評判が非常に高くなつて來たださうです。でそれがしづをであらうと思ひ、婆さん達は困つた事だとなやんで居た時に、それが殿樣のお耳に入り、殿樣はそのへーびを殺して首を取つた者には千兩與へると言ふ布令を出したのださうです。

でこの布令を耳にした爺さんと婆さんは、もしそのへーびがしづをであるならば、わしら二人に殺された方がよからうと言ふので、」間違つて俺が殺されても自分の子であつて見れば、喰はれても仕方がないせーに山へ行つてしづをを探して見よう」と言ふ事になつて、二人してきめましてね。澤山お辨當を持つて山へ行つたゞさうですに。

「しづをや、しづをや」

と大きな茅を分けて段々山の奥へ參りますと、大きな大きなへーびが、がさ！〳〵音を立てゝ目の前に現れて來たださうですに。それで婆さんと爺さんとが言ふには、

「今お殿樣のお布令で、お前の首を取つたものには、千兩箱授けると言ふのだ。お前はわし等二人を喰ふか、それともわし等に殺されてくれるか、」

とかう問ふたんださうですにさ。所がどうですね、やつぱり畜生でも、でつかい年をとつたものには人の言葉がわかると見えるですね。でへーびは頭をづーつと爺さんと婆さんの前に突出したのですつてさ。

「おゝわし等二人の言ふ事がわかつて、私等にお前の首をとらせてくれるのか」

ときいた所、うなついたので、泣く泣くそのでつかいへーびを殺して、殿樣に差上げた所、おほめにあづかつて、千兩を頂戴したんださうですに。それで昔の人が申します。

「野にも山にも、子は持ち置きな、千兩金程子は寶」

これはこの話から出たんださうですに。決して昔の人はでたらめは申しませんものなんですね。ちやんとかうしたいはれの話があるんですからね。（多呂南海子）

○ 慾の深い話

（富士郡須津村）

昔、一人のおぢいさんが山へ麥をさくりに行つて、「あゝ腰がいたい」と言つて腰をそらしました。すると、鳩が鍬頭へとまりましたので、フツトふくと、その鳩が口の中へ入つてしまひました。そしたらそのおぢいさんのおならは「ビンビヨドリゴリヨウオントコレ」と云つて出たださうです。さうするとおぢいさんは「こうりやおもしろい。屁が出るから一つお殿様の所へへッぴりぢぢいに行かう」と思つた。そこで殿様の門の所に居ると、家來が「そこにをるものは何者だ」と云ふ。「日本一のへつぴりぢぢい」と云つて威張つてをりました。すると家來が「そこで一つひつて見よ」と云つたのでおぢいさんがひると「オビンビヨドリゴリヨウ―ノウントコレ」といつたので、大へん家來達が面白がつて、家の中へ連れて行つて殿様の前で前と同じ様にひらせました。殿様も感心して、お金を澤山下さいました。そこでおぢいさんは大へん喜んで家へ歸ました。

よくのふかいおぢいさんが此の話を聞いて、自分もそのお金を欲しいので、「どうしてお金をもらつたか」と聞きました。良いおぢいさんは、仕方がないので「芋を食つて屁をひつた」といひました。すると慾の深いおぢいさんは澤山芋を食べて殿様の所へ行つて「日本一のへつぴりぢぢい」と大聲で云ひました。すると、皆が「この間の面白いへつぴりぢぢいが又來た」と云つて又ひらせました。ところがそのぢぢいさんは唯の大きな屁をブウとひつたのでくさくてたまりません。殿様は大へんにおこつて、そのおぢいさんを手討ちにしてしまひました。だから慾をかいて、人の眞似をするのではないよ。（齋藤かつ江）

○ 屁放り爺

（安倍郡長田村下河原）

昔、二軒屋があつた。一軒の家には好い爺と婆が住んで居り、一軒の家には惡い爺と婆が住んで居た。好い爺さんは畑へ出て麥けづりをして居た。するとすぐ先の木で鳥が「錦落葉松下（カラマツ）からひひんー」と鳴いた。お爺さんはあまり好い音だので、今度は鍬の上で鳴いてくれと頼んだ。すると鳥は鍬の上に乘つて「錦落葉松下からひひんー」と鳴いた。今度は舌の上で鳴いてくれと云つて、お爺さんが長い舌を出すと、鳥は又その舌の上に輕くのつて、「錦落葉松下からひひんー」と鳴いた。鳴き終るや否やお爺さんは、ぺろりとその鳥を呑んで仕舞つた。すると腹が痛くなつて來たので家に歸つて婆に床を敷いて貰つて寢た。しばらくしてお爺さんが

「婆やおならが出たくなつた」と云ふと、婆は「どうぞ御遠慮なく」と云つたので、いけむ（りきむ）と「錦落葉松下からひひんー」とおならが出た。そこで其のお爺さんは見せ物に町へ行つたが、その噂が殿様のお耳に入つて、「是非へつて見ろ」との仰せである。そこで爺は殿様の御殿に行つた。「庭でへれ」と云はれたが、庭では「冷えて困る」と云ふと、それでは「畳敷で」と言はれる。此處では「滑る」と云つたので、今度は金の座敷に連れて行かれて、其處でやつと、へつた。そして殿様のお褒めにあづかつて御金を一荷貰つて歸つて來た。これを聞いた隣の爺さんは、唯のおならと思つて、「婆や、今日はおからを一升買つておくれ、金もうけをするのだから」と言つたそして二日間おからをたべて、おならが出たいのを、我慢して耐めた。それから殿様のお屋敷に行つて、「わしに一つ屁をへらして呉れ」と云つた。そこで、庭でと云つたが庭では冷えると云ひ、座敷と云ふと滑べると云つて、終りに金の座敷に案内されて、殿様や家來の前で赤い顔をしていけんだ。所が、餘りいけんだので、二日分のおからが「ビチクタクタ」と出て仕舞つた。そして殿様や家來にとばつちりがかゝつたので、大變殿様が怒つて爺を血だらけにして仕舞つた。

家では婆が「おらん爺さんは今に金をひとせい貰つて來る」と云つて、屋根の上に昇つて短い首を伸ばして歸りを待つて居た。すると向ふから赤い着物を着せられて爺が歸つて來る。

それを見た婆は手を打つて喜んだ。處が家に入つて來た爺を見たら、何の事血だらけであつた。（鷲巣くり）

○ 狐はずるい

（志太郡焼津町）

昔々、天竺には獅子といふ獣が居て、日本には狐と狼が居た。又朝鮮には虎が居て、それ〴〵の獣は各國の王様であつた。或時狼が狐に向つていふには、「自分は日本の王であるから國を出る事は出來ない。で、お前朝鮮の國へ行つてその國をとつてきてくれ。」と。狐は「よろしい」とひきうけて出かけた。先づ朝鮮へ渡り虎に會つて「此の國の王は誰ですか」と聞いた。虎は「それはわしだ。虎は千里の籔を一とびに貫く程早いものだ」と威張つた。そこで「では競走して見ませんか」といふので、千里の山道を走る事にした。虎が走りだすや、狐はその尾にしつかりとつかまつてしまつた。「今日は馬鹿に大へんだな」と思ひながら虎はひたすらに走り、やがて千里の道程にも及びさうになつた。も少しといふところで虎は「どれ〴〵」狐さんは何處ら迄來たらう」と後をふりかへつて見た。そのひまに狐は急いで、尾から離れて決勝點へ驅せつけ、「どうです。私の方が少し早かつたね。」と得意になつて見せた。そして朝鮮をして日本の狼のもとに服從せしめた。狐は又、隣國はと聞くと天竺だといふので、其處

をも訪ねてうまく行つたら我物にしやうと、早速出かけて行つた。天竺にたどりついて獅子に出會ひ、「此の國の王は誰樣か」と尋ねた。すると獅子は「それは自分にきまつて居る。自分のなき聲は大したもので、一吼えすれば、鍋釜もはぜてしまふ。」と答へた。「では一つ吼えて見てはくれませんか」と頼つて置いて、狐は穴ぐらの中に入り耳をおさへて居た。獅子が吼え終ると狐は穴ぐらから出て「大した事もありませんね」と言つた。獅子は口惜しく思ひ。「今度なけば小獸どもは死んでしまふが、貴方がさう申すなら今一度吼えて見ませう。」といつた。狐は再び穴ぐらに入り、前よりも奥の方でかたく耳をおさへてゐた。やがて終ると出て來て「さうでもありませんでしたね」と平氣な顏をした。獅子は之でもかと怒り「三度目には自分の首がおちてしまふが、まだ分らないなら首がおちてもかまはない、吼えて見よう。」と言つた。狐は前と同じ樣に穴ぐらにかくれて耳をふさいだ。獅子はありつたけの聲を出して吼えた。吼え終つて狐が出て行つて見ると、獅子の言つた如く、その首がおちて居た。かくて遂に狐は天竺をも從へて獅子の首を持て日本に歸つて來た。

今獅子舞がかぶるあの獅子の首はこれだといふ。（神尾すず、岸本勝代）

○ 狐と獅子の話

（周智郡城西村）

ある所に一匹の狐が住んで居て、大變智慧自慢であつた。この狐が天竺の獅子の所へ智慧くらべに出かかけた。天竺に着いて獅子の所へ行き「智慧くらべをしようぢあないか」と云ふと獅子は「私は何も外に能はなくて吼える事丈出來るが、それならしよう」と云つてすぐにも吼え出しさうな樣子を見せた。狐は「一寸待つてくれ」と言つて一生懸命穴を掘り、それが出來上ると「さあよし」と言つた。そこで獅子は大きな聲で吼えた。狐は急いで穴の中へ飛びこんだ。そして吼え終ると、平氣な顏で出て來て又二度目も同じことをくり返した。最後に獅子は「今度は三度目だから、今度吼えるとお前が死ぬか、おれが死ぬかどちらかだが、それでも好いか。」と云つた。狐はそれで好いと云ふと、獅子は前よりも一層大きな聲で吼えた。狐は早速又穴の中へ飛びこんで、吼えやんだ頃出て來て見た。すると、ほんとうに獅子は死んで居たそこで狐はお土産にと云つて獅子の尻の方を殘して頭丈を持ち歸つた。それ故日本では獅子の頭をかぶつて舞を舞ふ。天竺では獅子の尾をかぶつて舞を舞ふと云ふ。（伊藤こと）

○ 海老の腰が曲つたわけ

（小笠郡相草村、川野村）

昔、大きな鳥があつた。自分より大きいものはないと思ひ、唐へ智慧くらべに行つた。いかい（大きい）川の途中までいくと、棒杭がたつてゐたので「こゝでひとよさ泊らす」と思

つてそれに泊ると「手前はなんだ」と棒杭が言つた。「おれん一番いかいで（俺が一番大きいから）唐へ智慧くらべに行く」「そんな馬鹿な事言つて、やめた方がいゝ、おれんいく」（俺がいく）」と棒杭が言つた。實はその棒杭は海老だつた。そこで海老は智慧くらべに出掛けた。途中いゝ穴があるで（あるので）一よさ泊らすと思つて入つたら「手前はなんだ」とゆはれた（言はれた）「おれほどいかい魚はないから唐へ智慧くらべに行く」と言つた。その穴はなまずの鼻の穴だつた。「そんな事いつてやめた方がいゝ、やめんとおれん鼻の穴から吹き出すぞ」とゆつて向ふの岩へふきつけた。それから、此處の海老の腰はまがつてしまつた。

（齋能壽子）

○ 西山寺の仁王

（榛原郡菅山村）

西山寺は眞言宗の寺で隨分古い由緒のあるお寺である。その門前に、海水を一口に飲み乾したといふ、口をカツと開いて睨めてゐる仁王と、富士の山を一跨ぎにしたといふ、足をふんばつた仁王のゐる門がある。仁王は、その地方に於て自分より力の强い者はめるまいと自慢して威張つてゐた。村人達はあんまり五月蠅いので支那にはドウモコウモといふ力の强い人があるといふ事を告げた。仁王は此の世に自分より力のある者があつてはけしからんと烈火の如く怒り、早速力くらべをし負かしてやらうと、海を越え、山を越え支那へ渡つて、さてその家を訪れると、女の人が一抱へもある樣な大きな火鉢を輕々と下げて來て、置いて行つた。仁王は火鉢をそつと持ち上げ樣とすると、どうしてどうして火鉢はびくとも動かない。尙動かさうと汗を流しながら力んでも一向動かない。それで、女でさへこんな重い物をさげる位だからドウモコウモといふ人はどんなに力がある事だらうと思ひ、怖しくなつて、そつと裏から逃げ出し、後も見ず一目散に西山寺へ歸つて來た。そして今にもドウモカウモが追つて來ないかと大いに心配して觀音樣に相談すると「それでは、池の端の百日紅の枝の、なるべく池の方へ差出てゐるのにつかまつてゐなさい。」と敎へて下さつた。

一方ドウモカウモは、日本から仁王といふ者が力くらべをしたいと云つて來たと聞いて、生意氣な奴とばかり來て見ると形も影も見えない。外に出て見ると遙か彼方に丸くなつて逃げて行く、それらしい人が見つかつたので、逃してなるものかと一生懸命追ひながら西山寺迄來てしまつた。見ると大きな池があつてその池の中で仁王がにこ〳〵笑つてゐる。しめたと思つて飛込むと觀音樣が直に上から蓋をして仕舞つた。ドウモカウモは謀られたと知つたが「ドウモカウモならぬ」と言つて沈んでしまつた。

今では仁王は欄の中に入れられてあり、その上つたと云ふ百日紅の木も、今尙花を咲かせて

居り、その高い山の上には御晋様の堂がある。（萩原みな）

○蛇の恩返し

（富士郡須津村）

昔、おぢいさんが野良へ仕事に出掛けたつてさ。そしたら子供が蛇をもちやすび（もてあそび）にしてをつた。そのおぢいさんは親切な人であつたので、蛇を殺しては可哀想だと思つて子供にその蛇をくんないか」と云つたが子供がくれない。「それでは二錢で賣つてくれ」といふと、賣つてくれたので「此處らにゐると殺されてしまふから、いそいでにげてゆけ。」と云つて逃がしてやつた。

少したつてからのこと、河原の土手を他に出掛けましたら、ぼさつかぶりの所からへひよつこりいゝ娘が出て「おぢいさん、おぢいさん。」といつてとんで（走つて）來るんだつてさ。さうするとおぢいさんはあんないゝ娘がとんで來るなんて變だと思つてゐると、そばへ來て「私はあんたに先日たすけられた蛇だ。この片袖をやるから、これを家へもつて行つて誰にも見せないで持つて行きなさい。そして、錢が出ろといへば錢が出るし、さつが出ろといへば札が出るから、お金に困る時、さう云つて出しなさい」と云つた。で、おぢいさんは家へそれをもつて行つて、お蔭でお金は困らずに暮したつてさ。（齋藤かつ江）

○忘恩の樵

（清水市）

昔、ある所に一人の樵夫があつた。或日いつもの如く山へ行くと傍の木の一番高い所に鷹の巣があつた。樵夫は鷲の卵をほしく思つたので落ちてゐた鎌を拾つてその端に繩を結びつけ、その鎌を高い枝へ掛けて、繩を登つていつた。もう少しで手がとゞくといふ時に、枝が鎌の爲に切れて落ちた。そこは丁度崖の端であつたので、樵夫は何十丈もある谷へおちて、人事不省となつてしまつた。すると、その向ひ側の穴に一匹の大きな熊が住んでゐて、可哀さうと思つたのか、その樵夫を穴の中へ入れて、なにくれとなく世話をしてやつた。樵夫はすぐ正氣にかへつたが熊がすぐ傍にゐるので非常におどろいた。然し熊が非常におとなしく、又兎を取つて來て喰べさせたりするので、どうやら安心して二三日其の穴の中に居て元通りの身体となつたので、深く深く感謝の意を捧げて熊と別れ、もう自分は獣は取るまいと誓つて家へ歸つて來たところが、其の話を聞いたお神さんが「もつたいない、そんな大きな熊はたんとは居まい。すぐ取つてくる樣に。」といふ。樵夫は初めは仲々聞きさうもなかつたが、遂に欲に目がくらんで鐵砲を持つてその熊をうちに出かけた。樵夫が以前の崖を靜かに降りて、も少しで降りきるといふ時、突然先の熊が飛出して來て、樵夫を咬み殺してしまつた。

○ 鼠の恩返し

或男が他所へ行つての歸り道、子供等が大ねずみをとつて撲り殺さうとして居るのを見た。「まあ待て、何でそんな事をする。」と云へば「ねずみなんて害にこそなれ、益にはならない撲り殺してたくさんだ。」と答へる。男は「それでも可愛想だ。おれが買はう」と、幾何かのお金を出して、子供等から受けとつた。そして大ねずみに向つて「危い所だつた。漸く子供の手から離れて命が助かつた。どこへでも早くにげよ。が、今日の命びろひに對して、お前の生涯中に何か一つ、報いてくれまいか。」といふと「有難うございました。いづれ又。」と言はぬ許りにうなづいて、どこへか立去つた。

しばらく經つた或日の事、一人の男がやつて來て「先日の御禮に御案内致したい所がある。私の後について來て下さい。」といふ。言はれるまゝに、明るいきれいな道をどこともしらず連れられて行つた。あたりは美しい景色である。やがて宮殿の樣な豪壯な構への前に出た。そしてその中の大廣間を通り、奥へ〳〵と案内され、とう〳〵千兩箱の幾つとなく飾られた床の間にある立派な部屋に納つた。それから、とり〴〵の御馳走が次から次へと並べられて、全く此の世の風も忘れたかの樣な氣持だつた。が、それにしても、どうかしてあの千兩箱を一つでもよいからかゝえ出したいものだと、御馳走を喰べながらも考へ續けた。色々考へた末、猫の眞似をしたらどうかと思ひつき、さて、さん〳〵よばれた（御馳走になつた）後、ニヤーンと一口まねて見ると、忽ちねずみ共はどと〳〵と大音をたてゝにげかくれてしまつた。それと共に今迄明るく美しかつたお部屋も、全くの闇になつてしまつた。男は手さぐりで漸くの事に一つの千兩箱を握り、暗闇の中をどうにかしてくぐりぬけ、長い事たつてやつと、どこかの縁の下に出た。そこの家では、庭でおかみさんが百姓仕事をして居て子供がそばで遊んで居つた。その子供が縁の下がもく〳〵持上るのを見て「お母、もぐらもちん、見よう」と叫んだ。「どれ〳〵と」おかみさんは、早速得物をもつてそれを叩き殺してしまつた。慾ばつたばかりに殺されてしまつたのだ。（神尾すず、岸本勝代）

（濱名郡芳川村）

○ 雀の恩がへし

昔、或所に、非常に情け深いおぢいさんと、非常によくばりのおぢいさんが住で居た。或日よいおぢいさんが畑へ出ようと思つてゐると、家の屋根に集つて居た雀が一羽ばつたりと落ちた。見ればまだ生れて間もない雀なので、可愛想に思つて、すぐにひろいあげて見ると足がを

情深いおぢいさんは、すぐに藥をつけ又屋根へあげておいて畑へ出て行つた。何日かたつておぢいさんが庭で仕事をしてゐると、すぐ目の前へすゞめが糞の樣なものを落した。おぢいさんはやれ〳〵雀がこんなものをおとした。と言つて拾つて見ると、何かの種の樣である。おぢいさんは何でもいゝから蒔いておかうと思つてまいておいた。

すると、ひようたんの木が生えて、その木に大へんよく、ひようたんがなつた。おぢいさんは一つ種とりにといつて、大きなのをとつておいた。餘程熟したので「どれ種でも取らうか」と割つて見ると、中から非常に澤山のお金が出て來た。おぢいさんは喜んで早速隣の、悪いおぢいさんにその話をした。悪いおぢいさんは、大變羨しく思つて自分の家に來た雀を早速大竿をもつて、ふり廻し、足を折つた。そして藥をつけて又屋根へあげておいた。そして毎日の樣に庭で仕事をして、雀が種を持つて來るのを待つてゐた。しばらく經つた。或日、雀が來て一粒の種を落していつた。いぢ悪なぢいさんは喜んで、早速それを蒔いておくと、やつぱりひようたんの木が出て來た。そして澤山なつたのを、おぢいさんは皆種にと言つて、大きくしておきました。相當大きくなつたので、どれ〳〵といつてわつて見ると蛇だの蛙だの、まむしだのぞろ〳〵出て來た。（小澤ちゑ）

○ 騙された男

（駿東郡長泉村）

昔、とてもさむしい山中に夫婦の者が住んでゐた。或晩、綺麗な月夜であつたが針仕事をしてゐた妻が夫に「誰か門を叩いた樣だが」と云つた。夫が門を開けて見ると、そこには月の光をあびて輝くばかりにきれいな女が立つてゐた。滴るばかりの文金高島田、大きく結んだ光る帶、長い振袖。丁度御殿女中か大家の姫君のやうである。女は一言も言はずその凄いまでにきれいな眸で男の顔を見つゞけてゐたがやがて歩き出した。

男は聲も出さずぶる〳〵ふるへてゐた。と月の光の中で女は振り返つて男をさしまねいた。男は思はずふら〳〵と外に出て行つた。

何時になつても歸つて來ないので、妻は心配になつて、次の朝隣の人にかくと告げた。やがて村中の驚きとなり、若者から老人迄村中總出で探しに出掛けた。其の家の前の桑畑には男の足跡らしいのと茶碗を伏せたやうな跡とが入りみだれてゐた。其の後をたどつて行くと、山の神堂の前に出た。廣い其の拜殿の前の芝生はふみしだかれて所々に血潮もついてゐた。

村人は不安な眼を見合せながら、とにかくそこで食事を取つた。その時一人の氣のきいた老人がふと緣の下をのぞいて見た。「ゐたつ」大きい聲で老人が叫ぶと「どれ〳〵」と皆首を出

して見た。件の男は床下の土に頭を埋めたり、又しきりに土を掻いたりしてゐる。

「や、い、音がするぞ。笛、太鼓でどうもい、音だ」

こんな事を言つてゐる男を、堂の縁の下より引出して、皆は口々にどうしたときいた。しかし男は間の抜けた顔をして

「何にも知らねえが、きれいな女が來てしよへーらぢう（あちらこちら）連れて歩いて、それから此處へ來て、角力とるべーつて言ふから取つたゞ。おれがころんぶ（ころげる）と、おれの頭の毛をなめて起してくれただ。」

とこれだけ語るきりであつた。そしてとう〳〵氣違ひの樣になつてしまつたとか言ふ事である。（加藤わい子）

（駿東郡長泉村）

○ 蜘蛛嫁

昔美しく優しいお嫁さんがあつた。何一つとして云ふ處が無い。けれども、只御飯を澤山食べるのが缺点であつた。で其家の姑が不思議に思つて或日そつと見てゐた。さうとも知らない嫁は大釜で御飯をたいて、それを全部むすびに作り、髪の毛を分けては頭の中に皆入れて仕舞つた。そして何處ともなく家を出て行つた。姑は默つて跡をつけて行つた。嫁はすた〳〵と歩いて奥山の中へ入つた。すると何處からともなく小さい蜘蛛の子が一ぱい集つて來た。そして嫁は、姿も恐しい大蜘蛛と變り、持つて來たむすびを子蜘蛛に與へてゐた。（加藤わい子）

（富士郡須津村）

○ 夜の蜘蛛

或所に大變慾張りの男がゐた。男は、お嫁さんを貰ひたいのたが御飯を食べない人がよいと云つて居た。するとそこへ「私を嫁にして下さい」と云つて來た女があつた。「御飯を食べませんか」と聞くと「食べない」と云ふ。で早速お嫁にした。さてかくて男は毎日仕事に出た。すると不思議にもそのあと何時も戸が締つてしまふ。變に思つて、或日屋根へ上つて樣子を見て居ると、件の嫁は狸が化けてゐたのであつて、一生懸命飯をお腹につめてゐるのである。「こん畜生人だましやがつて」と大變怒つて次の朝早く籠へ入れて山の方へ捨ててしまふことにした。そしてその時親戚の人達を集めて善後策を相談して居た。すると其所へ大きな蜘蛛が出て來たので或人が「この野郎」と云つてたゝき殺した。すると驚いた事にそれは狸に變つてしまつた。だから夜の蜘蛛はどんなものでも必ず殺すものだと云ふ。

これと反對に早朝來た蜘蛛は其の日にお客のあることを知らせるのだと云つて殺さない。

（齋藤かつ江）

○怪鳥

（庵原郡兩河内村）

昔は庵原郡の山付きの村々では、かぞ（楮）を山畑に植えて、冬から春になると山へかまどをついてコガといふものを掛けて其の楮を切つてふかした。かぞふかしをする爲に、朝は二時頃からおきて半道又は一里以上もある奥山へ出掛けて行つたもんだ。小川の向田に（兩河内村中河内小川向田）金衛門といふ人があつて、ある朝、ベラボーに早くかぞふかしに奥山へ行つた。行く道に瀧があつて不動さんを祀つてある。あまり早いから、この瀧の近所でショイコを敷いてやすんで煙草をのんでゐた。少し眠くなつたので山へよりかゝつてうと〳〵ねむつた。する身体がゾグゾグして來たので、目を開いてみると、自分の頭の上、一間ばかりのところを一ひろもあるやうな大きな鳥が、羽根をひろげてグルグル舞ひまはつてゐる。大きな鳥だなあと思ふと其の鳥がまアりながら「金衛門早いなア」と言つた。これを聞いて吃驚して青くなつて逃げ歸つて來た。この瀧のみちを通る時は、誰でも物凄い感じがするとこだ。（大熊治子）

○からす蛇

（濱松市）

或寺に惡戯な小僧があつた。或日、和尚が隣村の檀家へお使ひに行かせたが、出際に「烏蛇が今頃居るが、決して馬の糞を投げつけてはならぬ」と言ひ教へた。小僧は長つて出て行つたが、暫く行くと烏蛇が土手際にとぐろを卷いてゐるのを見つけた。小僧むら〳〵と惡戯氣が起り、一つどうするか見てやれ、と考へて早速側にあつた馬の糞を烏蛇の頭目掛けて投げつけた。烏蛇は非常に氣の高い蛇なので、糞を投げつけられると同時に大いに怒り、直に體の半分以上ものび上つて、小僧を追つて來た。小僧は「しまつた」と思つたが遲い。夢中になつて元來た道を逃げ出し、お寺へ飛込んで「和尚さまつ」と言つて助を乞ふた。和尚は「それみた事か」と言つて叱りつけ、急いで戸棚へ隱した。蛇は勢込んで走つて來たが、階段まで來ると其所へぶつかつて、死んで了つた。それを見た和尚は、やつと安心して「小僧や出て來なさい」と呼んだ。が返事がない。不思議に思つて戸を開けると、不思議や小僧は、烏蛇大の物に咽喉を締められて死んでゐたと云ふ。（渡邊はな）

○花咲爺さん

（榛原郡白羽村）

昔、ぢいさんとばあさんと居ました。ぢいさんは山へ柴かりに、ばあさんは川へ洗濯に行きました。ばあさんが洗濯してゐると、ゆはて（上手）の方から三つ組の重箱が流れて來ましたばあさんは、それをひろつてかへりました。

家へかへつてその重箱をあけて見ますと、一番上の箱には、かはいらしいえんのころ（犬ころ）が一匹、その下ののには、おぼた（牡丹餅）が一杯、その下にはおこは（赤飯）が一杯入つて居ました。これを見た、ばあさんは、大變うれしがつて、そのごつそう（御馳走）でえんのころをいかく（大きく）しました。えのころは、日一日といかくなつて、大變ずない（かしこい）犬になりました。——後は普通の花咲爺と同じ——（松井せい）

○かちかち山

（小笠郡横須賀町）

むかし〳〵爺と婆とあつた。

或日爺が畑へ行つて一生懸命耕して居ると、一匹の狸が來て其所の石に腰を掛けて「ぢいさ畑打ちや腰ぽつくりしよ」と馬鹿にする。いまいましい奴だと爺さんは鍬を振り上げて追かけたが、足の早い狸はいち早く山の奥へ逃げ込んでつかまりさうにもない。仕方なくあきらめて畑に歸つて耕して居ると、又出て來て例の口調で馬鹿にし始める。復爺は追つたが矢張りつかまらない。その晩一夜考へた爺さん、明日の朝は早くから出かけて石にもちを塗り狸の來るのを待つた。それともしらぬ狸は、今日も亦さん〳〵爺を馬鹿にしようと思つてやつて來て、石に腰を下し「爺さ畑打ちや腰ぽつくりしよ」と悪口をたゝき始めた。と爺さん今日こそはと力んで鍬をふりあげ「此の野郎」と近づいた。逃げようとしても、もちにくつついて逃げられぬ狸はなんなく生捕られ、手足をしばられて家に持つて行かれおばあさんがお米を搗いて居るところへつりさげられた。そして爺さんは、歸るまでに此の狸を煮て置く樣に言ひつけて復畑へ出た。狸は「婆さん婆さん私が代つてお米をついてやるから私の縄をといて下さい」と頼んだ氣のいゝ婆さんは、狸の縄をといて下してやつた。すると自由になつた狸は、婆を殺し着物を着て婆さんに化けた。そして殺した婆さんを煮て爺さんの歸るのを待つて居た。やがて爺さんはぼつくり〳〵歸つて來て狸の煮付を食べた。爺さんは「婆さん〳〵、うまいがどうも人間臭い」と言つて婆さんを見ると、太いしつぽが出て居る。「婆さんお前の後のしつぽはなんだ」と言ふと、さとられたと思つた狸は「爺さ〳〵流しの下の骨を見よ」と言つて山へ逃げて行つてしまつた。

爺さんがおい〳〵泣いて居ると白い兎が來て泣くわけをたづね、

「お爺さん私が必ず敵をとつてやりますから」と言つて別れた。兎はある日狸をさそつて柴刈に出かけた。背中に柴をしよつて狸が先になつて歸つて來ると、後から兎がカチ〳〵火を切り出して狸の柴にもしつけたからたまりません。狸は背中一面眞赤にやけどうしてうん〳〵うなつて寢て居た。今度は兎は薬屋に化けて狸のやけどにとうがらしをぬりつけたのでたまりませ

ん。ひり〳〵して居たゝまれず狸はぼろ〳〵涙を出して「兎君〳〵君の藥はばかに痛いねえ」と言つた。兎は笑をこらへて「此は良くきく藥だからだ。此をたわしでこすると尙良くきく」と言ふ。本氣にした狸は一生懸命痛いのもがまんしてすりむいたからたまりません。赤裸になつた狸はおい〳〵聲を出して三日三晩泣きつゞけた。やつとなほつたので兎にさそはれるまゝに一緒に海へ出かけた。兎はわざと自分の舟は木でつくり狸の舟は泥でつくつて沖へ出た。泥の舟は次第に水が入つて來た。とう〳〵狸は救を兎に求めたが兎はかいで狸をたゝいて沈めてしまつた。此所でめでたくおぢいさんの仇はとれましたとさ。（横山てい）

○ 昔話

（磐田郡浦川村）

昔とんとこ或處に、お爺さんとお婆さんがあつて、お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に。お婆さんが川で大きな屁をブツと出いた。さうしたら、山でお爺さんが、「くさからう、」と云つたげな。（古澤はな）

○ こぶとりの話

（濱名郡芳川村）

昔ある所に、こぶのあるおぢいさんが居た。或日おぢいさんは山へ仕事をしに行くと、雨が非常にひどく降り、風も非常に強くなつて、とても家に歸られなくなつたので、大きな木の、腐りかけた、洞穴の中に小さくなつて、雨をさけて居た。すると、その穴の奥の方で人聲がする。變に思つて、行つて見ると、鬼が、大勢お酒を呑んで踊つたりして騒いで居る。

おぢいさんは、「これは面白い、一つわしも踊らう」と、早速一つ踊つて見せた。すると鬼どもも非常に喜んで、おぢいさんに、酒を飲ませたりして、いろ〳〵にもてなした。そしておぢいさんに、「又今度の時も必ず來る樣に」と、約束し、その約束の証に、何か取らねばいけないと言つて、おぢいさんの生れつきのこぶをもぎ取つてしまつた。

夜が明けたので、おぢいさんは家に、歸つた。いぢ惡の隣のおぢいさんが、その話を聞いて自分もこぶがあるので取つて貰はうと思つて、その大木の穴へ出かけた。すると、矢張り鬼が居て、酒盛をやつて居た。惡いぢいさんは、そこへとび込んで、早速踊りををどつた。然し今度は前のよいおぢいさんの樣に上手でなかつたので。鬼どもは、おこつて「下手なお土産に、もう一つこぶをくれてやる」とほつぺたに、くつつけてしまつた。（小澤ちゑ）

○ ひいらぎ、鬼は外福は內の話

（志太郡燒津町）

一人のお爺さんとお福といふ娘とが貧こんな、生活をして居つた。或夜の事、鬼がお福を嫁

に欲しいと貰いに來ました。若しくれないなら食殺すといふので、仕方なくやる事にした。孝行娘のお福は仕方なへ出掛けたが、出る時からし種を一合くれといつて、貰つて行つた。鬼につれられて行く道の角々に、この種をまいて行つたら、來年になれば芽が出て大きくなるだらう。來年でなくとも、それは實を結び年々に殖える事であらう。お爺さんが若し會ひたくなつたらそのからしを日當てに尋ねて來てくれる樣にといふのである。

數年の後、お爺さんはどうかして娘をつれもどりたいと思つて、道の角々のからしに導かれて、たどりついたのは山奥である。其處には立派な營みをなしつゝ暮す娘お福を見出す事が出來た。親の來訪だといふので非常にとり持つた。お福はお爺さんと一緒に、國へ歸りたいと思つたが、どうかして、鬼との間に出來た子供をも連れ出したいと、すきをうかゞつてゐた。或日の晨鬼共は皆揃つて出かけて家はからになつた。此の時とばかり二人は子供を連れて國へ歸つてしまつた。歸つてから子鬼が話すには「親鬼共は大歳の晩來て自分達をとり戻さうとするだらう。その時は自分をまたさばきにして門口にかけ、鬼は外福は內、と大よばりせよ」と。愈々その夜は來た。犧牲となつて子鬼は門口にかけられた。子鬼の教へた如く大聲に呼ばはると、鬼共はそれを聞いて、門口のまたさばきを見て直ぐ逃げて行つたと云ふ。

これから子鬼の代りに門口にはひゝらぎの棘々したものを立てゝ、鬼は外福は內と呼ばる樣になつたのだと云ふ。（神尾すず、岸本勝代）

○ 蟲

—六十九歳翁の話—（濱松市）

昔、或所に殿樣があつた。或時、此の殿樣の家に代々傳はる、大切な寶物が紛失してしまつた。殿樣は大變御心配になつて、家來を幾人となく遣はし、色々とさがさせたがわからない。そこで殿樣は考へたあげく、常日頃自分の爲に盡してくれる、あの喇巧な馬に賴んだらと思つて、馬に向つて「お前がその寶物をさがしてくれたら、わしの大事な姫をやる」と言つた。すると馬は喜んで、しばらくすると不思議やどこからかその寶物をさがし出して來た。そして馬は姫をもらひに殿樣の所へやつて來た。殿樣は、考へて見ると急に馬のやうな動物に自分の姫をやるのが嫌になつて、馬を殺してしまつた。そしてその馬の皮を干して置いた。丁度其處の所をお姫樣が通りかゝつた。すると俄かに風が吹いて來て、その風と共に、馬の皮がお姫樣をぐる〳〵と卷きくるんで、高い木の上に上つてしまつた。それを見た殿樣の悲しみは一通りではなかつたが、お姫樣はとう〳〵其の中で死んでしまつた。

幾日かたつた或日、その木から虫が落ちて來た。殿樣は、その虫を姫だと思つて大切に飼つて置いた。それが今の蠶だと。（小澤ちゑ）

○ 間抜け泥棒

（安倍郡長田村河原）

昔、山の中に、爺さんと婆さんとが、草鞋や草履を作つてお金を貯めて住んでゐた。泥棒がこの巾着錢を盜みに行つた。そしてもうやすんだかと思つて中の樣子を表から伺つて居ると、婆さんが爺さんに「おぢいさん、今夜はみしんの夜着を着て寢すか、こもんの夜着を着て寢すか」と云つたので、泥棒はこんな好い夜着をもつてゐるかと、眠つた頃をみはからつて行つてみると、蓆とこもを被つてがさがさしてゐたので、驚いて逃げて行つて了つた。（鷲津くり）

○ 半殺し、皆殺し

（清水市）

或人が山奥に入つて困つた末、やつと一軒家を見つけて泊めてもらつた。その家には老人夫婦が住んでゐた。旅人が二階に居ると、お婆さんとお爺さんが下で話をして居る。聽くと「半殺しにすべえか、皆殺しにすべえか。」といつて居る。驚いた旅人は早速逃出さうと「濟みませんが今夜はこれで」と行かうとした。驚いた主人がよく〳〵意味を正すと「今、話を聞いて居ると、半殺しか皆殺しかと言つて居る樣だから」といふ。「まあ。それは今金つばを作つてあげようとして、その餡を作るに、小豆を半分つぶすか皆つぶすかといつてゐるのだ」といはれて、やつと安心したといふ。それより小豆のつぶし餡の事を半殺しといふ。（池田ゆき）

○ 狼ともるぞ

（安倍郡長田村）

昔山中に爺さんと婆さんと住んで居た。或大雨の降る夜、狼が食べに來て、表に立つて中の樣子を伺つて居ると、中では、「狼よりももるぞおそろし」と云つて話して居た。狼はおれよりも恐ろしいものが居れば、自分もどうにかなつて仕舞ふと思つて逃げて行つたと云ふ。（鷲巣くり）

○ おゝかめよりもろぞうおそろしい

（榛原郡白羽村）

昔、或所にたまらん（大變）貧乏なぢいさんとばあさんが住んで居た。或雨のしよぼ〳〵と降るさぶしい（淋しい）ばんげん（夕方）ゆるいばた（圖爐裡ばた）で二人でこんな話をしてゐた。

「ばあさんや、お前此の世の中で何が一番おつかないえ」「それりやーぢいさん、おゝかめ（狼）さ」「ばあさんお前おゝかめが一とうおつかないか、おりやーまつと（もつと）おつかないものがある」「ぢいさん、そりやー一体なんだえ」爺「もろぞう（雨漏り）だよ」

此の時に、丁度、雨戸の外まで來て家の中をのぞいて居た狼があつた。えゝ（よい）すきがあつたら飛び込んで行つて、食つてやらうと思つて來たが、ふと耳を立てゝ聞いて見ると、なんだか自分のことを言つてゐる樣だ。そこで野郎共一休何を話してゐるだらうと思つて、二人の話をしてゐるのをよくきいて居ると、ぢいさんが「おゝかめよりもろぞうが恐ろしい」言つた。これを聞いた狼はけつこう（すつかり）おどけて（驚く、おじける）しまつて、今まで自分よりきつい（强い）ものはないと思つて居たに、そんならもろぞうはよつぽどきついものに違ひないと思ひ込んで、もう今、もろぞうが來たらたまらんといそいで自分の穴の方へ逃げ出した。

丁度此の時、此の家につい此の頃生れたばかりの子馬のあるのをぬすめえ（ぬすみに）來た馬泥棒があつた。その泥棒はおゝかめのしつこを出いて（一目散に）かけて行くのを見て、これは子馬が逃げ出いたに違ひないと思つて、一生懸命おつかけて、にがしてたまらすか（たまるものか）と後からしがみついた。おどけたのはおゝかめである、「これはたまらん、もろぞうに取りつかれた」と一所懸命ふりはなさうとしたが、どうしてもはなれない。それでも一所懸命やつてゐる中に、とう〳〵いかい（大きい）洞穴のそばまで來てふりおとしてしまつた。その馬泥棒は穴の中へころばり（ころがり）こんでしまつた。おゝかめはえんやつと（やつと）安心して自分の穴へにげかへつた。これをそばの木の上で見て居た猿が「おゝかめの奴、あの洞の中へ何かをおとして行きやアがつた。なんだか見て來てやりませう」といそいで木からおりて、長い尻尾を穴の中へいれてさがいて見ると、中でこまつて居た馬泥棒は、これはきつとだれかが綱を下いてくれたに違ひないと思つて、猿のしつぽにきゆうととつかまつた。おどけた猿はいそいで尻尾を引き上げようとしたが下の男は、はなさばこそ、猿はこれではたまらんと一生懸命ひつぱる。あんまり力を入れすぎたので、たう〳〵猿のしつぽは根つこからとれてしまつた。

そんだで（それ故に）猿の尻は今でも赤いだつちよう（だと言ふ）。せいから（それから）あんまりりきんで力を入れたであんな赤い顏になつてしまつたゞげいな（そうな）。

（松井せい）

○ 狼と雨漏り

（小笠郡橫須賀町沖之須）

或山の中に老婆が唯獨り住んで居た。一日雨の降る日に、若い頃の思ひ出唄を歌ひながら、糸を紡いで居ると、表の破れ戸を、こつ〳〵叩くものがある。風かなと耳を澄すと、やはりこつ〳〵續けられて正しく人のおとなふ樣だ。此雨の降るに山の中へ入つてさぞお困りの事だら

うといそ〳〵立つて戸を開けると、人の影は見えない。外では風が松の木の上にびゆう〳〵うなつて居るばかりだ。暫く不思議に思つて立つて居ると突然横合から「うおー」とほへて飛びついたものがある。驚いて良く見るとそれはらん〳〵と火の様な眼をした狼だ。恐しさに青くなつて突立つて居た老婆は、今にも飛びつかうと再び身がまくた狼に向つて大聲に「狼よりもろぞ（雨の漏るところ）恐し」とさけんだ。それを聞いた狼はまだ此世に自分より恐しいものがあるのかといつて、あはてゝ歸つて行つたと云ふ。（大石よれ、横山テイ）

（濱名郡雄踏町淺羽）

○ 侍と狼

これはよく祖母が寝物語にして呉れた話である。

或山奥に一人のお侍が住んでゐた。雨がしと〳〵と降る様な晩になると、狼が出て來る。お侍は其度毎に、長持の中に入つて「狼殿よりもろどのはこはい〳〵」と云ふと、狼は自分より強い人が居ると思つて其のまゝ山へ行つてしまつたと云ふ。（山内きみゑ）

（濱松市）

○ 狼ともりと

昔、山家にお爺さんとお婆さんとが住んでゐた。そこの家は大變あばら屋であつた。或雨のしよぼ〳〵降る陰氣な日に、のつそりと入つて來た一匹の狼が、このあばら屋の一つきりの竈の前に火にあたつてゐて離れなかつた。老婆は恐しくて〳〵どうする事も出來ない。それで心の中で「あゝうるさいなあ。狼め、早く出て行くといゝがなあ」と思ふと、其の狼は眼を光らせて、意地惡く、その思つた事をその通り言ふのださうである。それで老夫婦は困り果てゝ、このまゝ放つて置いたら夜になつて屹度二人共食べられてしまふだらうと思つてゐた。

その時ぽつりぽつり雨漏りがしはじめた。それでお婆さん、何の氣なしに「狼殿よりもりとが恐い」と云つた。すると狼は自分よりまだ恐しい者がこの近所には居るのか知らんと思つてのつそり〳〵出て行つてそれから來なかつたさうである。（波邊はな）

（磐田郡佐久間村）

○ 心掛けのよい娘

昔、とい一〳〵（遠い遠い）或る所に、年取つたお母さんとその娘とがありました。それで仲良く暮して居りました。娘の手ひとつで一家は保つて居りました。

或祭の夕方、娘が祭から歸つて來て、御飯をたき、その御飯を移すぶん（移すばつかり）にしておき、餘りのねむたさによつて遂寝てしまひました。それでお婆さんは「年に一度の祭だもの」といふお婆さんの親切心で、その御飯をおかわに移してしまひました。そお婆さんは

元々目が悪かつたんですよ。娘は目をさまして、驚きましたが、御飯を川に持つていつて洗ひ自分がせつかく働いてとつたものだので棄てる事も出來ず、その御飯をたべましたが、お婆さんには他の御飯をたいてあげました。

數日後の或夕方、屋根の上に大きな蜘蛛が下りて來ました。見るとそこには大きな袋が置いてあり、その袋の中にはお米が入つて居りました。その後はその袋で、小しも食べ物に困らなくなつたとさ。（尾關すゞ子）

○ 生意氣なお嫁さん

（小笠郡土方村）

何處かに一人の生意氣なお嫁さんがあつた。或日主人が他所から歸つて來て言ふのに「前の嫁は俺が『さぎが足を氷にとぢられて』と詠むと、續いて『それも泥鰌の食べたさに』とつけた。うまいではないか」と云ふと、生意氣なお嫁さんは「その位の事は誰にだつて出來ますよ。私も一つ付けてみます」と云つたので、主人がそれではと「山をへだてゝ月が登りけり」と云ふと「あれも泥鰌を食ひたさに」と云つたとさ。（野々山ぎん、湯川菊江）

○ 邪險な嫁

（濱松市）

昔、邪險な嫁があつた。姑があつて、この姑は眼が見えなかつた。姑はうどんが大好であつた。或日例の如く嫁に「おうどんが欲しい」と言つた。嫁は「うるさいね。そんなに欲しけりゃ、今日は思ふ存分食べさせて上げる」と言つて、大きなみゝずを澤山取つて來て、それを食べさせた。姑は眼は見えなかつたが、早くもそれと覺つた。が「こんなにして生きてゐるよりみゝずでも食べて死んだ方がよい」と思つたので、我慢して無理に食べて了つた。そして間も無く死んで了つた。

それから間もなく、一匹の蛇が何所からともなく出て來て、その邪險な嫁の頸に卷きついた驚いて取らうとしたが駄目である。之を取らんとすれば金の如くになり、そのまゝの時は、如何にもヌメ〳〵した蛇で、次第に血を吸ひ、遂にその嫁を殺して了つたと云ふ。（渡邊はな）

○ 嫁が姑をいぢめた話

（靜岡市）

姑が盲目となつたので、娘はそれをよいことにしておかわに御飯盛つて出してゐた。姑は何も知らず喜んでそれを食べてゐた。それから暫くして姑は死んだ。

或日娘は、猫が藁の中へ子を産んだのをたゝき殺してしまつた。するとこの娘は猫の樣になつて、自分も藁の中へ子供を産んだ。さうして毎日子供を背負つて、重箱の中へお辨當を入れ

て、棒を持つては蛙を取つて歩いたさうだ。さうしてこの子供に、やはりおかわに御飯を盛つて食べさせたといふことである。（金子千代子）

○ 姑が嫁をいぢめた話

（靜岡市）

姑が嫁に「この田に全部植ゑてしまはなければ家へ歸るな」といつた。嫁は困つたが仕方がない。それでお天道樣にどうぞこれを植ゑ終るまで明るくしておいて下さいと願つて、一生懸命植ゑつけた。空は植ゑ終るまで明るかつたが、終ると同時に眞暗となつてしまつた。そしてその嫁は疲れて死んでしまつた。それからその田には、いくら植ゑても植ゑても決して米はとれないとのことである。これを嫁田といふ。（金子千代子）

○ 牛田

（靜岡市）

主人が家の男どんを隨分ひどく使つた。或日「この田を全部植ゑてしまはなければ家へ歸つて來るな」といはれ、その男どんは一生懸命牛と一緒に働いた。男どんは働いた後で牛に「お前もよく働いてくれたが、あんなひどい家へ歸る事はいやだ。お前俺と一緒に死んでくれ」とよくいひ聞かせて、一緒に死んだ。それがその主人の家の近所の人の夢枕に立つて「自分が使はれてゐたその家に七代祟る。」といつたのださうだ。それ以來この田にいくら植ゑてもお米はとれず、又その家の一番主な人がきつと早く死ぬのださうで、長年たつてから、もうよからうといつて植ゑても決してお米が出來ないといふことである。（金子千代子）

○ 田の草取り

（小笠郡土方村落合）

姑と嫁が田の草取りをしてゐた。田の草取りの大事は、稻の根元をよくかく事で、大變骨が折れる。そこで姑が考へたあげく、皮肉を云つて嫁に根元をかかせようと思つた。そこで云ふには「これ嫁や、稻の根をよくかけば姑が早く死ぬと云ふから、かゝぬようにしておくれ」

（野々山ぎん）

○ 肉つきの面

（濱名郡芳川村）

或所に嫁と姑と居た。嫁は大變に阿彌陀樣を信仰して居た。が姑はとても意地惡で、嫁が阿彌陀樣によくお詣りに行くのを、非常に嫌つて居た。或晩嫁はいつもの通りお詣りに行つた。姑は、今日こそうんと怖い目に合はせて嫁の信仰をやめさせようと、お宮の出口のかげに鬼の面をかぶつてかくれて居た。嫁がをがみ終つて、出て來ようとすると「ガバッ」と出て來て持

つてゐた刀で切りつけた。かくて姑は、すぐに面をとつて家に歸らうとしたが、面がどうしても取られない。いくらどうしても取れない。仕方がないので家にとびかへり押入れに入つて力を入れて取らうとしたが、矢張りどうしても取れない。

一方嫁は、一時氣絶したが、ぢきに氣をとりもどして、家へ歸つて來た。自分はたしかに殺されたと思つたのに、自分がかけて居つた布のみが、右肩からずつときれてゐるのみで、身体は何ともなつてゐなかつた。「あゝこれはきつと佛樣のお蔭だ。」と思つて、すぐに佛壇へ行つて、阿彌陀樣を見ると案の定阿彌陀樣の肩が、右肩からすつときれて居た。

姑の方は、今は仕方がなく、たう〳〵嫁さんをよんで、わけを話して「どうかこの面を取つてくれ。顏はどうなつてもよいから。」と賴んだ。嫁はそれではといふので、うんと力を入れて取ると、顏の皮がすつかりむけて面についてとれて來た。それから姑は大變善い人になつたと言ふ。（小澤ちゑ）

○ けちな姑

（濱松市）

昔、吝嗇な姑が居た。汁に入れる味噌をまでも嫁には出させず、一々小屋から自分で小出しにして嫁に與へて居た。

この姑が或時善光寺參りに行つたが、その時味噌の小出しをして置いて來るのを忘れたので途中其の事許り氣にやんでゐた。一方嫁の方では、姑が小出しをして行かないのでどうしようと迷つてゐたが、良人が「構はないから出しなさい。」と言ふので小屋へ出しに行つた。ところが大きな味噌樽の蓋を開けるや否や、嫁はキヤツと叫んで逃げ出してしまつた。樽の中には何時入つたか大きな蛇が、とぐろを卷いてぢつと鍵首をもたげて嫁を睨んでゐたのである。嫁は早速良人を呼んで何とかしてくれと賴んだ。良人は蛇の尾を持つて四五日空中を振廻して、やつと許り向の山へ投げてやつた。蛇は其のまゝ何所へか姿を消した。二人は何となく氣にかゝつたが、その日はそのまゝ暮れた。

明朝、姑が歸つて來た。ふと見ると額に大きな新しい疵が斜についてゐた。

嫁と良人は始めて何か解つた樣な氣がした。人の念力は恐しいものである。（渡邊はな）

○ 蛙になつた牡丹餅

（靜岡市）

或所におばあさんが居た。そのおばあさんは嫁を大變いぢめた。ある日近所の家からぼた餅を貰つた。おばあさんはそれを嫁にやるのが惜しくてぼた餅に向つて「ひとがあけたら蛙になれ。わしが明けたらぼた餅になつて居よ」といひ聞かせて出て行つた。これを聞いた嫁は「よ

し今日は一つおばあさんを困らせてやらう。」と思つて、その留守にそのぼた餅をみんな食べて、代りに蛙を一杯入れて置いた。おばあさんが歸つて來て、食べようと思つて蓋を開けると中から蛙がたくさんとび出した。おばあさんは驚いて「わしだよ、わしだよ、早くぼた餅にかへれ。」といつたが、蛙はぴよん〳〵座敷中に飛び廻つた。おばあさんはそれを一生懸命追ひかけたが蛙はとう〳〵ぼた餅にならなかつた。（金子千代子）

○ お　萩

（濱松市）

物を大變に惜しがる姑が、或所からお萩をいたゞいた。目分だけ食べたいと思つたが、丁度用たしに出かけねばならなかつたので「嫁の來た時や、蛙になれ〳〵。わしの來た時や、お萩になれ〳〵。」と言つて置いて出て行つた。所が不思議にも、嫁の來た時はお萩になつて、嫁は食べる事が出來た。姑が來た時は蛙になつて、皆飛んで行つて了つたと云ふ。（渡邊はな）

○ 海のしほからいわけ

（清水市）

或正直なお爺さんが、或河のそばに住んで居た。此人に或時石臼が投つて、それをひけば欲しいと思ふものが出ると云ふので毎日樂しく過して居た。或日、お爺さんの留守中にお鹽が無くなつたので、お婆さんが「お鹽出ろ〳〵」と言つてひくと出はじめた。所が、もう充分になつても止め方を聽いておかなかつた爲に、家中がお鹽になつた。困つて、臼を外に持出して側の河に入れて了つた。臼からは續いて鹽が出るので、それで海の水が何時までたつても鹽からいと云ふ。（池山ゆき）

○ 海のしほからい話

（濱名郡芳川村）

昔、或所に二人の兄弟があつた。一人はとても慾張りで、一人はとてもおとなしい親切な子だつた。

或日、二人で寢てゐたが、眼を覺して見ると、その親切なおとなしい子の方の枕もとに、金の槌が置いてあつて、一通の手紙がつけてあつた。その手紙には「おまへは大へんよい子だから神樣がこれを授ける。何でもほしいものは、これに三回さういつて振れば、きつと出る」と書いてあつた。その子は大變喜んで色んなものを出いてはゐた。意地惡の子はそれが欲しくつてたまらない。どうかしてそれを盗まうとしたが、いつもその子がもつて居るので、どうしても盗めない。

或日、その親切な子がねてゐる時をうかゞつてそつとその枕もとにおいてあつた金の槌を持

つて逃げてしまつた。どん〳〵逃げて行くと大きな海に出た。そしてそこには一さうしか船がない。意地の悪い子は、これはしめたぞと思つて、その船に乗つてどん〳〵沖へ出て行つた。だんだん時がたつと、とてもお鹽がほしくなつた。そこですぐその金の槌を振つて鹽を出したが、止め方を知らなかつたので、何時までたつても鹽はどん〳〵出るばかりで、船に一杯になつてもまだどん〳〵〳〵出る。そのうちに船はばがばんとひつくりかへつてしまつた。今でもその爲に海の水は鹽からいのだと。（金原せつ）

○棒定

（安倍郡有度村）

昔清水の松本さんに任へた人である彼棒定は、棒をもてば何物をも恐れなかつた。「どうだ棒定もう日は暮れるが、今から急いで下田へかけ取りに行つて來てもらいたいのだが」「あゝさうですか。ちやあお晩飯を食べてから行つて來やせうよ。明日の朝頃までには歸られるらに」

下田へ行くには淋しい天城を通らねばならぬ。「あゝあ、天城にはおいはぎがきつと居るのだ。何しろ早く行かう」よいしよ〳〵彼は山へ上つて行つた。と案の定上で三人ばかし火をもいて（燃して）居る。髭がもしや〳〵した大きな男共が、長い刀を二本づゝさして居る。「あゝあ寒い〳〵おんにも（俺にも）少しあてゝくんなよ」棒定は火の傍へ行つた。男共は變な顏をして見てたが何か目で合圖をした。「あゝあおかげで暖くなつた。有難うよ。大分樂に行かれるあばよ」と立つて行くと「おい〳〵、ちよつと金を貸してくんねえか」「馬鹿を言つちやあ困るに。おれはこれから下田へ行つて金をかへしてもらうんだ。今は何にも無いよ。歸りには有るから待つてゐなよ」「そいちやあ衣類を出せ」「まだそんなことを言ふのか。今寒くてあてゝもらつたぢやあないか。それで衣類を出せなんて、馬鹿を言つちやあ困るに」「何にもよこさねえぢあ一本行くぞ」「ちあやらうか」一人が飛びかゝつて來た。棒定は得意の棒をぶん〳〵ふつて「さあ來い」廻した棒が男の頭へボカンとあたつた。と頭が半分ピョンと飛んで「う……」又一人が來たがすぐに背中をやられた。外の一人はこそ〳〵と逃げ去つた。「おめえつちやこん度世るするもんだから、いやな目に合ふんだ。仕方がねえ」と言ひ捨てゝすた〳〵下田へといつた。

用ををへて歸る時、昨夜の場所近くへ來ると、向ふからがや〳〵二三人で話をして來る。「どうちやア、お前つちやあ。朝此處を通るだつちよーが、えらい目に合つたもんのお」「何でも下田へ行つたつてたよ」「あそこの父さんが一番かあいさうだの」「今日とむらひだつてさ」

それから天城へは、おいはぎが出なくなつた。

又或夜、久能街道から府中へ行つた。蛇塚の所までくると、向ふに眞白いものがひよこ〳〵歩いてゐる。「やあ、來たな。何かしたら一つぶちこわしてやらう」と思つて行くと「定や、どこへ行くんだ。」と言つて手をつかんだ。「おれかい、ばあさん」と言つて手を握つて片方でさぐつて見ると、さらさらしてゐる。「やつぱりこりやあ狐だな」といふので、手をつかむとブーンと海へなげ入れた。

歸りに通ると、濱の人が、打上げられた大きな狐を見てワイ〳〵騒いでゐた。（前島かね）

○ 初さと十兵衛さ

（濱松市）

濱名郡五島村に「初さ」といふ人があり、福島に「十兵衛さ」といふ人があつた。二人は大變に仲がよくて、二人共大力持ちであつた。或日「十兵衛さ」が「初さ」に「今年は一つ伊勢參りに行かまいか」と云ふと「初さ」は「うん、俺等まだ芋を植ゑねえからそれを植ゑてひとつ行かずよ」と言つた。「十兵衛さ」は「ぢや俺がひとつ手傳つてやるから」と言つて、二人は竹鍬をまるで草でも拔くやうに、スボスボとゆいて、芋を植ゑて、明日行く事になつた。

無事に伊勢參りをして、ついでに都へも廻つて行かうと云ふので、奈良へ行つた。すると丁度、大佛樣の大殿の棟木をあげて居る處だつた。その棟木が非常に大きいものだから、蟻がゴトウ虫を引きずる樣に澤山の人がうようよたかつて居た。それを見た二人は笑ひながら「情けねえ奴等だなあ、あのざまはどうでえ」と話し合つて見て居た。すると其人達が怒つて「こんな重いものを、この位かゝらねえで上るものか。そんな事言やあ貴樣上げてよされ」と言つた。「初さ」と「十兵衛さ」は、「よしこれか」と二人一本づゝ持つて、悉く上げてしまつた。人々はおつたまげて言葉も出なかつた。そして後から其棟木に「西島の初つさ」「福島の十兵衛さ」と彫りつけて置いた。それが今でも殘つて居と云ふ話。（金原せつ）

○ 千石清兵衛さん

（靜岡市）

一色と云ふ處に作米千石もある樣な財産家があつた。其家ではお嫁さんを貰ふ時に、道にずつと米俵を敷いて、お嫁さんに其の上を歩かせた。そんなにお米を粗末にしたので、其の後は財産も減り、お嫁さんも早く死に、終に其の家は絶えてしまつた。（大村ちか）

○ 生きかへつた話

—六十七歳老婆の話—（濱名郡芳川村）

或所に、非常に釣が好きで、信心の嫌ひな人があつた。或日、何時もの樣に釣をして居るとと一体のお地藏樣が流れて來た。その人は、いつも嫌がつてゐる佛樣ではあつたが、拾ひあげて

持つていくともなく家へもちかへつて、あれこれとものをあげておまつりした。そしてそれからといふものは、この人は、この佛様に對して丈は非常に信心をした。ところが、その人は病氣になつて、大勢の子供と妻とをおいて病死してしまつた。そして閻魔様の前まで行くと、一人の地藏様が現れた。見るとそれは常々自分の信仰して居つた地藏様であつた。その地藏様は閻魔様に「この人はまだ大事な人で、死んでいつては後のものが非常に困るから」と一生懸命頼んでくれました。閻魔様は「では仕方がない、かへしてやらう。」と言つた。鬼どもがそばへ來て「この野郎、娑婆へ又行くか。ちあかうしてやる」といつて、その人のおしりをつみ切つてとつてしまつた。

娑婆の方では多くの人が集つて、和尚さんがお經を讀んでゐるところであつた。突然バーツとがんおけ（棺）の蓋があいて、その死んだ人が出て來た。村人はびつくりにも大びつくりして外へとび出してしまつた。和尚さんもとび出したが、又思ひ直して「自分は幽靈だの亡魂を、をさめるのが役目なのに、皆と一緒にとび出したら困る」と思つて座敷へかへつて來た。するとそれはほんとうの人間で、死んでいつたはずの人が立つてゐるのだつた。二度びつくりしてよくきくと、その人は前の様な話をして「それが證據に、これこの通りおしりをつみ切つて取られた」といつて見せたさうだ。（金原せつ）

○ 鹿と紅葉

（濱松市）

昔、一人の小僧があつたが、或日縁の近くで手習をしてゐると、鹿が來て、お手本を、食べてしまつた。

小僧は憤つてこれを殺してしまつた。

その鹿を近所のある山へ埋めた。するとその墓に一本の紅葉が生えて來た。これから、鹿と紅葉は常に一緒に考へられるのだと。（金原せつ）

○ 鹿と紅葉

（濱松市）

昔、奈良附近に武家の家があつて、父が死んだ後は母一人子一人で暮してゐた。子を三作といつた。お寺へ勉強にやつてあつたが、或雨のショボ〳〵降る夕暮、一匹の鹿が三作の居る近くへ來た。三作は退屈だつたので、いたづらに側にあつた文鎭を投げつけた。所が當り所が悪くて共の鹿は死んで了つた。當時は鹿を殺すと、生埋めにされる事になつてゐた。いくら母が一人息子だといつて縋つてもお願ひしても駄目だつた。遂に三作は生埋めにされて了つた。鹿の骸と共に埋められた三作の墓に、母は心を込めて二本の紅葉を植ゑた。年月經て共の紅葉は

生長した。それで今でも、鹿を描けば必ず紅葉を添へ、又鹿の肉を「もみぢ」といふのだと云ふ。（渡邊はな）

○ おはおり茶屋

（安倍郡長田村）

昔、徳川家康公が宇津谷をお通りになつた時、ある茶屋にやすまれた。「ぢゞい、向ふに見える山は何か」「はいあれはかちぐりでございます。」「ではこれは何か」「それはかち栗でございます」お立ちになるとき、わらぢを二足求められた。すると親爺は一足半やつた。公は「何故一足半くれるか」といはれた。すると爺は「貴方様が戰に勝つてお歸りになります時、後の半足を差上げます」と言つた。公は成程と思つて戰に行かれた。さうして勝たれた。宇津谷を通る折、その茶店によつて「お蔭で戰に勝つた。何かのぞみはないか」と言つた。爺は「何にもございませんが、人足共の亂暴をおしづめ下さい。」と言つた。公は引受けて尙、歸り際に御自分の羽織をぬいで、爺に賜つた。それからこの茶店を「おはおり屋」と言ひ、諸國の大名がこゝを通る時は、立寄つてこの羽織を拜して行つたとの事である。

（增田きぬ江）

○ 家康と桶屋

（磐田郡山香村）

武田信玄と權現樣と戰爭をして權現樣が負けて和泉へ逃げて行つた。丁度桶屋が桶を直してゐた。「敵に追はれたから隱してくれ」と賴まれて桶屋は今直してゐる桶の中へ權現樣を入れて仕事を續けてゐた。そこへ信玄が追つて來て「誰か逃げて來なかつたか」と聞くと、桶屋は「知らん／＼仕事の邪魔になる。早く行つておくれ」といつた。信玄は方々探したが、家康の姿が見えないので行つてしまつた。權現樣は「お前のおかげで助かつたのだ。お前のいふ事なら何でも聞きとゞけてやる」と言はれたので、桶屋は「桶を直してから後でそこらを片付けるのがいやだから後片付けをしなくてもよい事にしてくれ」と賴んだ。それからは何處の桶屋も仕事の後片付けをしないさうだ。（本多みち）

○ 藤の話

—六十八歳老翁の話—（庵原郡興河内村）

昔、興河内村の西河内の伏木（フシギ）といふ所に祀つてある氏神さんの宮が朽ちたから、修繕しようといふので森の木を木挽にきらせた。

木挽が宮の境内で其の木を切りはじめると、木に卷かさつて（卷かつて）ゐた藤に、十月頃

だといふのに、たちまちにして立派な花が咲きみだれた。さうしてあたりが物凄いので、木挽は青くなつて土地の庄屋どんへ行つて「木を切り切めると、藤の花が咲いてすごくて切られない」と言つた。すると庄屋が「よし〳〵俺が行つて花を散らせてやる」と境内へ出かけて行つた。見ればなるほど藤が立派に咲いてゐる。そこで庄屋が歌をよんだ。

「藤咲くや見事に咲いた森のふじ木挽(ッリ)に色をやるべし」

すると不思議にも其の藤が見る間にことゞ〳〵く散つて了つた。それで其の木を切つたが何のさはりもなかつた。昔から森木を切る時は神様に譯を言つて切るものと云はれてゐる。

○ 猫と十二支

（清水市入江町）

或時王様が、動物を集めて宴會を開くことになつた。

動物達は皆喜んでその當日の來るのを待つて居た。ところが猫が宴會の日を忘れた。そこで鼠の所へ聞きに行くと、鼠は猫にわざと一日遲らせて教へてやつた。

宴會の日になると、動物は我先にと出掛けて行つた。一番先頭には牛がのそ〳〵と歩いて行く。その後に虎が行く。例の鼠は、遲れては大變と、先づ牛の背中に飛乘つた。そして門に着くや否や中へ飛込んで、一番早く王様の前に行つた。

御殿では着いた順に、鼠、牛、虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、雞、犬、猪、と行儀よく並んで、お茶やお菓子を御馳走になつて、喜んで各々家に歸つた。

猫は、その次の日、喜び勇んで王様の門前に來た。が大變靜かなので不思議に思つて門番にきいて見ると、「宴會は昨日だつた」といつて大變笑つた。

それからといふものは、猫は大變鼠を憎み鼠と敵同志になつた。今でも鼠を見付け次第取つて食ふ。そして、十二支の中には含まれて居ない。（池山ゆき）

○ 各務原

（清水市）

昔、山賊がお姫様をさらつて來て、廣い野原で云ふ事を聞かせようとしたがお姫様は聞かなかつた爲に、殺して裸にして、その原の一本杉につるしておいた。それとは知らずに狩に出た王様が、そこを通ると黑い物がつるしてあるので、近寄つて見ると自分の娘であつた。驚いてよく〳〵見ると、體中に野原に居た蚊が一面にたかつて居る。王様は「一体これは蚊か身か」とおつしやつた。それより各務原といふ。（池山ゆき）

○ 福助

（志太郡焼津町小楠）

ある所に、おとましいいきやあ（大變大きい）家があつての、そこんとこの家ぢやあ福助つてエいふ男どんをつかつて居ただつてさ。大晦日の晩、旦那がいふにア「福助や、おれんとこの家例は、元日の朝はんやく起きて若水を汲む事に決まつてる。だからおみやアもあしたの朝はんやく起きておれをおけェてつから（起してから）若水を汲むだぞ。ええか。せエからそん時な、「新玉の年の始めの福助が、命益々若水を汲む」つていふだぞ。分つたか。ってつて幾度も繰返し繰返しおせェ（教へ）といただつてさ。福すきやアのオ「よしよし覺へた。だんな様かしこまりました」ってつてゆつただつてさ。せエだもんだで（それだから）「それぢやアおやすみ」ってつて寢ちやつたつてさ。

あしたの朝んなつたもんだて、旦那さんをおけェて若みゾウ汲まつかと思つて（汲まうかと思つて）井戸ばちやア行つただけェが（井戸端へ行つたが）主人が其處にこつそり居るのを知らにやアきもんだで（知らなかつたから）若みゾオくみながらうたアうたつていふにやア「めん玉のひつくりかへるあしたには命かぎりの死水を汲む」つてさ。主人はびつくりしちやつておかみさんを呼んで、福すきよヲひまアとらせよつてゆつたつてさ、さうしると（さうすると）おかみさんが「まあ／＼お待ちなしやア、せつかくあのずもせんころ（先頃）やとつたばつかりで、今日は元日の事ぢやアあるし、さう／＼人をおい出すなんて、縁起ぢやアにやア。もうちつと我慢しておくんなしやア。何かの間ちぎやアでをかしなことヲゆつたかもしれにやアが、今言いかへさせるんて、ゆるしてもりやアちやア」つてあやまつてくれたつてさ。せエから福助をよんで火を起させたけェがのオひゆうきん竹（火吹竹）でそこしらぢゆウをひやアだらけ（灰だらけ）にしちやつたもんだで、又主人におこられちやつたけェが、そこへ又おかみさんが出て來て、「新玉の年の始めの福助が福ふきかけるひゆうき竹」と一句讀んだもんたで旦那さんも怒るのヲやめたつてさ。せエから福助につけこヲ（附句）しよつてゆつたもんだで、「可愛い旦那がひやアになられる」とゆつてとう／＼おいだされちやつたつてさ。せエだけ。（神尾すず、岸本勝代）

（志太郡焼津町）

○八百屋の店

八百屋の店に、大根と冬瓜と南瓜とが列んで居た。客がやつて來て、冬瓜と南瓜とを買つて行つた。大根のみ殘つてしをれて行くのを見た八百屋の主人は、「かうしをれて行つては何もならない。まあずた／＼に切つてしまふか」と言つた。すると大根は驚いて裏へとび出して言ふには「これ／＼まをしだんな様、大根ばかりは許しておくれ」そして樽の中にとび込んで「これからわたしやこうこう（孝行）になる」と言つたとさ。（神尾すず）

○ あまのじやく

昔お釈迦様が、「草の種は播かぬ方がよいだらう」と仰せになると、あまんじやくは「いゝえ、お釈迦様、それはなりません。それでは人間が怠けて困ります。草の種は私がまきませう」と言つて、それからは毎日毎日人に分らぬ間に草の種をそつとまいておくのだと云ふ。

（志太郡大富村）　（鈴木美代）

○ 人魚と鰯

人魚を食べると長生きすると云ふが、亦、鰯の尻尾を食べても長生きすると云ふ。それは、鰯と人魚とは大變仲がよくて、尻尾を互にふれ合ふからだといふ話である。（鈴木美代）

（小笠郡相草村）

○

牛蒡と人蔘と大根とが伊勢參りに行つた。宿屋に泊つた所が、牛蒡があまり黑いので、人蔘と大根ははじくまいかといつて相談した。そして牛蒡の寢てゐる中に、そつと行つてしまつた。牛蒡が目を覺してみると人蔘も大根もゐない。さてはと思つて亭主に聞くと「人蔘さんも大根さんももうとうに立ちました」と云つた。（齋能壽子）

（安倍郡千代田村上足洗）

○ 弘法様の智慧

弘法様が小さい時にあるお寺の小僧をしてゐた。和尚さんは、自分だけお砂糖をなめて弘法様にはなめさせなかつた。或日、和尚さんは寺を留守にしたので、弘法様は戸棚の中をさがして砂糖を見つけた。砂糖には、「之を食べると死ぬ」と書いてあつた。けれど弘法様はお砂糖を食べてしまつた。そして日頃から和尚さんが大切にしておいた茶椀を碎いた。弘法様は和尚さんが歸つてくると、「和尚さんの大切なお茶椀を碎いたので、死なうと思つてお砂糖をなめました」と言つたとさ。（伊良むめ）

—七十五歳老婆の話—（小笠郡横須賀町）

○ 甘酒

或寺のお尚様とおば様は、毎晩の様に、小僧共がねてしまつてから甘酒を沸した。それを知つて、どうかしてその甘酒にあづかりたいと思つて居る一人の小僧は、或日お尚さんの前へ出て「お尚さん〳〵どうか私の名をエイカンと言ふ名にして下さい」と頼んだ。「なんだ小僧、エイカンだなんつて變な名ぢやあないか」「いゝえ私は此の名が好きです」

その日は暮れて夜になつた。例の通り甘酒を沸したおば様は「和尚様エイカン（良い加減）です」と言つた。と、待つてましたとばかり小僧はがばとふとんからとび出して「和尚様御用ですか」と兩手をついた。小僧の出現に面喰つた和尚さんは「小僧、何用があつて起きて來た」「へい唯今エイカンでございますつて呼びましたから、御用かと思つてとび起きて來ました」「あゝさうか。それでは小僧、どうせ起きて來たものだ、お前も一杯飲め飲め」といつてたう〳〵小僧の願はとげられたといふ

此の話は又かうも話されてゐる。和尚様おば様がぼた餅をつくつたのを、小僧がそれにあづからうとし、いろいろ考へた結果くちゃ〳〵とちりんは示し合せて床へ入つた。さて大分夜も更けて、例のぼた餅をつくり始めた。豆を煮るくちゃ〳〵〳〵といふ音に、此所ぞとばかりとび出して行つた小僧くちやくちやは、仕方なくその手傳をおほせつかり、豆が煮えて、それをつぶす時のちりんちりんといふ音にちりん小僧とび出して、二人共にそのぼた餅にあづかつたと言ふ話。

だから人にかくれて悪いことをすればきつと何時かどうかした拍子に知れるものさ。

（横山てい）

○四十雀

（志太郡焼津町）

昔、若狭の國に、二人のわからずやが住んで居つた。ある時他の國の、俳諧の先生の所へ、出かけて行つたといふ。さて歸らうと思つたが、一体どうして國へ歸つていゝのか分らないで困つてしまつた。先生は一句よんだら歸してやらうとおつしやつた。が句は讀めず、毎日御ぜんをもらつて食べては「若狭へ歸りたい〳〵」と言つて居るばかりでどうする事も出來なかつた。或日の事、ふと窓をあけて見てゐると、四十雀が覆の中に入つて行つた。それを見て「四十雀おひ（老い）の中に入りにけり」と讀んだ。そこでもう一人に、何かいへと言はれたが、なかなかうまく出て來ない。唯國へ歸りたいばかりだ。そこで「若狭（若さ）の國へ歸る道はないかなあ」といつたら、それが立派な附句になつてやつと國へ歸されたといふ。

「女郎のたんすに小鳥が一羽、明けて見たらば四十雀（始終空）」（神尾すず　岸本勝代）

○一口話

（周智郡三倉村）

昔、犬には足が三本、火鉢に据ゑてある五徳には四本あつた。犬は歩く時非常に不自由であるが、五徳は三本あれば充分だといふ。ことで犬は五徳から足を一本貰つて犬は四本、五徳三

本になつた。犬は五德に貰つた足を大變大切にした。小便する時片足をあげるのはその故だといふ。

昔、大へん偉い繪書きがあつた。或人が彼を困らせようと思つて「太鼓の音を書いて吳れ」と賴んだ。繪書きは平氣で引受けた。「明日取りに來て下さい」と言ふ。翌日とりにゆくと、殿樣が槍を持つて天を突いてゐる圖をくれた。そして「てんつく〳〵」といつた。

昔、ある處に箱屋があつた。或人が「スンバコ（病名）を作つてくれ」と言ふと、箱屋は「宜しう御座います。どうか、センキ（病名）の木を持つて來て下さい」と言つた。

（鈴木とし）

（磐田郡掛塚町）

○ そら豆の黑條

或時、そら豆とお豆腐と二人で旅をした。一本橋へさしかゝつたので、まづ、お豆腐が先に渡ることにした。やはらかいお豆腐はブル〳〵〳〵と震へながら、やつとの事で渡ることが出來た。これを見たそら豆は、笑ひながら、意張つて勢よく渡りかけた。ところが橋の中頃へ來た時、どうしたはづみか足をすべらして、川へ落ちた。そして大怪我をした。豆腐は驚いてすぐ醫者のところへ行き、その豆の傷を縫つてもらつた。この時丁度醫者のところには白い糸がなく黑い糸ばつかりだつた。その爲に今でも蠶豆の條は黑いのだといふ。

（鈴木きよ　川合金女）

○ そら豆の黑いすぢ

—六十七歳老女の話—（濱名郡芳川村）

或所に一人のお婆さんが住んで居つて、そのお婆さんは、或日おかずを煮ようと思つて、そらまめをひやかし（ひやす）て、餘程經つて見にいくと、餘程やはらかになつて居ました。だのでお鍋にいれて煮ようとしたはづみに、一つのそらまめが庭の隅へころ〳〵と轉がりおちました。お婆さんは「まあ一つばかり」と思つて、今度はたいつけ（燃付け）にと、藁をもつて來ました。すると、餘り風があつたので、一本の藁がお婆さんの手から離れて、又そらまめのゐる庭の隅へ行きました。今度もお婆さんは「まあ一本ばかり」と思つて、そのまゝにしておきました。そして今持つてゐた藁で火をたきつけて、仕事をして居ました。するとお婆さんが知らないでゐるうちに、眞赤な炭が、ころ〳〵ッと落ちて、又さつきのそら豆のゐる隅へ轉がつて落ちました。

炭と藁とそら豆の三人は「伊勢まゐりに行かう」つて出かけました。そしてだん〳〵いくと小

さな川がありました。三人は困つてしまつてゐると、やつと藁がいゝ考へを出して「やあ、わしが一番長いから、わしが橋になつてやるから、おまへさん達が渡つて、それから二人でわしを向ふ岸へ引きよせておくれ。」つて言ひました。二人はこれはいゝ考だと、すぐに藁に橋になつてもらひました。そして炭もそら豆も、自分が早く渡らうとしました。そして大喧嘩をしまして、とう〳〵そら豆が負けて、炭が先に渡ることになりました。そして炭が半分位渡り始めると、こわがつてどうしても前へ進みません。藁はあつがつて「早く〳〵」つてせき立てるせき立てればよけいに進めない。そのうちに、藁は焼け切れて、藁と炭は「チュー」つて水の中へおつこちました。

そばで見てゐたそら豆は「さつきの罰だぞ」つて大きな小〳〵聲を出いて大笑ひをしましたので、お腹が「パチン」とわれてしまひました。困つて泣いてゐると、そこへお裁縫屋がきまして「なぜ泣くの」つて聞きました。そら豆はその話をしました。お裁縫屋は「それは可愛想に」といつて「ぢあ丁度青糸がないから黒糸でぬつてやる」といつて黒い糸で、そら豆のお腹をぬつてやりました。それが今でも殘つてゐて、あのそら豆の黒いすぢだとさ。（金原せつ）

○三人弟子

（濱名郡芳川村）

或寺へ三人の子供が手習に行つた。

その一人は武士の子、一人はお寺の子、他の一人は農夫の子であつた。或日和尚さんが、三人に向つて、「りん」といふ言葉を、後先につけて歌を、讀んで見よと問題を出した。

最初に武士の子にいはせて見ると、「りん〳〵とさしたる、小わきざし、一ふり、ふれば、首がおちりん」といつた。お寺の子にさせると、「りん〳〵とりんをたゝいて經讀んで、おふせをもらうて腹がとてりん」とやつた。農夫の子は「りんりんと、りんとほしたるこえいわし一口食へば口がひりりん」とやつた。和尚さんは、三人共同じ樣にうまいと非常にほめた。

（小澤ちゑ）

○お豆腐

（濱名郡芳川村）

或日、お豆腐屋の主人が用事があつて、家が留守になつた。そこで、お豆腐と、お揚と、おからとが、「今日は何かして遊ばう、親方がゐない留守に、」「あゝさうだ、」といふので、三人は座敷の眞中で、お話して遊んで居た。そのうちお揚が、「一つ歌でも作つて、遊ばう、先づおれから先に歌はう、」といつて、次の樣な歌を、うたつた。「水攻め火攻めはいとはねど、油ぜめとはなさけなや」次にお豆腐が「では、俺も一つ」といつて歌つた。次に、おから

が歌はうとする所へ、丁度主人が歸つて來た。

あはてゝお揚やお豆腐は夫々自分の桶にすべり込んだが、どうしてもおからだけは入れない。あせればあせる程、方々に擴がつてしまつた。そこへ、主人が來て、「誰がこのからをこんなにひろげたのだ、きたない」といつて、片の端から掃いて捨てしまつた。からは口惜しくてたまらない、そこで庭から大聲でかうどなつた。「俺が旦那は加藤清正！」

すると主人は、座敷に居つて、「そりや又なぜに？」と訊いた。

するとからは「からを攻めるぢやないかいのー」といつたとさ。（小澤ちゑ）

（沼津市）

○ 種痘屋

昔は上香貫二瀬川にホーソー屋があつて、其處でホーソーをうゑたものだ。書籍には明治二年に始めて行ふとあるが、之は嘘で、之より十年前に行はれた。（岡林よしゑ）

（沼津市）

○ オランダ人の來航

寶暦五年頃、オランダ人が來航して、三十五六名が沼津本町間宮喜右衛門に一泊した。宿泊料六圓、フラスコ、アネイシの酒（今のウトスキーと云はれる）を土産に置いた。此時近所中に酒を配つたといふことだ。（岡林よしゑ）

（沼津市）

○ 唐人が始めて來た事

祖父母がまだ大變小さい時分、戸田沖に異人さんが難船して上陸した。其の時始めて唐人を見た。まだ子供で何にも解らなかつたが、異人さんは子供達にパンをくれた。其のパンは油くさくて到底食べられなかつた。其時テンキリ（全くと云ふ意の方言）家の者も丸太を持つたりして造船に行つたと云ふ事である。（岡林よしゑ）

（安倍郡大川村）

○ かろーと

大川村栃澤の五郎左衛門といふ家の某は、京都東福寺の開山となつた人であるが「家に惡いことがあつたら、これを明けて見よ」と云つて、生きてる中かどうかしらないが、石のかろーとの中に入つたさうだ。かろーととは茶箱位の大きさで、木で作つてあるものは衣類を入れた石で作つたものは棺桶とした。（增田きぬ江）

（周智郡三倉村）

○ お札が降つた話

この話は今八十六歳のお爺さんが話して呉れたもので、お爺さんの二十二歳の時の事だといふ。

伏見戰爭の直後、秋葉正一位、皇太神宮のお札が、ひら〳〵舞つて降りた。それが當時の財産家五軒ばかしに一枚づゝ舞ひ込んだのであつた。

入つた家々では庭に杉の葉で祠を造つて祀り、村人は皆假裝したりして十日間も騷いで歩いた。第一にお蔭參りに行つた連中は掛川の人だといふからかなり廣く降つたらうとの事。

それからも村人達は世の中がよくなつて、お金が降るかも知れぬと、人々の心は浮かれたのである。（鈴木とし）

○人肉の味

（磐田郡浦川村）

浦川村から半里餘行つた所に田島といふ所がある。徳川の末の頃、其所に佐々木周作といふ人があつた。七歳まで田島で育ち、三州の月といふ所に奉公にいつたが、十二歳頃には百姓してゐるのがいやになり、にげ出して、東に東にと遂に江戸まで出たが頼る人もないので、そこらをうろついてゐた。あげくに、或徳川家來のもとに仕へてゐた。官軍と幕軍との戰が起るや佐々木周作氏もこの戰に出た。戰つてゐる中に、次第に山の奥へ入り、そこで非常な空腹を感じた。食を求めて見たが、何一つない。困り果てゝ、そばに死んで居る人間を刀で突き、肉をゑぐりとつて食べ空腹を滿たしたといふ。そのとき人間は隨分うまい物だと感じた。が、うまいといつては他の人達の心にどう惡影響を與へぬとも限らぬからと思つて、その人は、人肉はすい、味のあるものだといつたさうである。

人間はうまいものだといふ話の一つとして、いつも語られる話である。（古澤はな）

昭和九年三月二十五日印刷
昭和九年三月三十一日發行

靜岡縣傳說昔話集
非賣品

編輯者　靜岡縣女子師範學校鄉土研究會　森田勝

發行者　靜岡市吳服町四丁目　三上時太郎

印刷者　靜岡市馬淵町二丁目六　杉江章圭

印刷所　靜岡市馬淵町二丁目六　東晃堂杉江印刷所
振替東京三五一二九番

發行所　靜岡市吳服町四丁目八番地
合資會社　靜岡谷島屋書店
振替東京六七八八九番